翻　訳
イヴァン・A・イリーン
『神と人間の具体性についての教説としてのヘーゲル哲学』

初版、モスクワ、1918（再版、サンクト・ペテルブルク、1994）

第二巻　人間についての教説、

第三部　人間の生活活動の意味についての教説

第14章　人間

第15章　意思

・・・・・　永井健晴

*

Translation　(Перевод)

Иван А. Ильинъ

Философия Гегеля как учение о конкретности Бога и человека

Москва 1918 (Санкт–Петербург 1994)

Том 2, Часть 3,

Глава 14 Человек

Глава 15 Воля

・・・・・　Takeharu Nagai

『神と人間の具体性についての教説としてのヘーゲル哲学』
イヴァン・A・イリーン、1918
Философия Гегеля как учение оконклетности Бога и человека
Иван А.Ильинъ, 1918

目次　оглавление

И. И. エヴラムピーエフ、イヴァン・イリーンとヘーゲルに関するかれの著作

И. И. Евлампиев. Иван Ильин и егокнига о Гегле

序文　Предисловие

第1巻　神についての教説 Том первый. Учение о Боге〔Gott, Gottheit〕

第1部　神性の本質についての教説

Часть первая. Учение о сущности Божества

第1章　具体的・経験的なもの　Кокретное–эмпирическое〔Konkret–empirisches〕

第2章　**抽象的・形式的なもの**　Абстрактное–формальное〔Abstrakt–formalisches〕

第3章　**思弁的思惟一般**について（**理性**についての教説）〔spekulatives Denken, Vernunft〕

О спекулятивном мышлении вообще（учение о разуме）

第4章　**思惟の現実（実在）性**　Реальность мысли〔Wirklichkeit des Denkens〕

第5章　**思惟の一般（普遍）性**　Всеобщность мысли〔Allgemeinheit des Denkens〕

第6章　**弁証法**　диалектика〔Dialektik〕,

〔противоречие, контрадикция, Widerspruch：Sein–Nichts〕

〔Differenz und Gleichheit/ Negation und Bestimmung〕

第7章　**具体的・思弁的なもの**　Конкретное–спекулятивное〔Konkret–Spekulatives〕

〔Konkretheit–von et. Abstrahieren–Abstraktheit〕

〔Sinnlichkeit – Verstand – ursprüngliche Apperzeption – Vernünft〕

〔Begriff：Kongruenz von Subjekt und Objekt, Teil und Gan-

zes, Besonderes und Allgemeines〕

第2部　神の道程についての教説　Часть вторая. Учение о пути Божием

第8章　**概念と学術**　Понятие и Наука〔Begreifen−Begriff, Wissen−Wissenschaft〕

第9章　**論理**　Логика〔Logik〕自己限定（самоопределение, Selbstbestimmung）

第10章　**宇宙**〔被造物世界〕　Мироздание〔geschaffene Welt〕

第11章　**活動現実性について**　О действительности〔Wirklichkeit〕

〔Leben : Wirken : Herstellen, Handeln, Arbeiten〕

〔Φυσις − νομος / πραξις − ποιησις / θεωρια − εμπειρια〕：〔Dynamik/Statik〕

第12章　**世界の諸形象**　Образы мира〔Bildung, Gestaltung〕

第2巻　人間についての教説　Том второй. Учение о человеке

第3部　人間的生（生活活動）の意味についての教説

Часть третья. Учение о смысле человеческой жизни

〔überleben−gut leben, ευ ζην : φυσις−ανθρωπος−θεος〕

〔Stoffwechsel zwischen Mensch und Natur : Anpassung an der Umwelt〕

〔Analogie von Ontogenese und Phylogenese des Selbstbewußtseins〕

〔wechselseitige Bestimmung von individueller und kollektiver Identität〕

〔Gattungswesen−ensemble der gesellschaftlichen Verhältnisse〕

〔Wert : Dasein, Sichern, Angehören, Anerkennen, Selbstverwirklichen〕

〔Sinn−Sinnerfülle : gut/böse, schön/häßlich, recht/unrecht, wahr/unwahr〕

第13章　**自由**　Свобода（第29巻、第2号）

〔ελευθερια, libertas, Freiheit, Autonomie−Selbstbestimmung〕

第14章　**人間**　Человек（本号、第30巻、第1号）

〔ανθρωπος, homo, Mensch, human〕 человек ↔ Бог（божество）

〔homo sapiens, homo loquens, homo faber−homo demens〕

第15章　**意思**　Воля − 〔разумная и благая воля〕（同上）
〔βουλη, voluntas, Wille−θυμοειδεϛ−ανδρεια : αρετη〕
〔Wissen, Denken ←Wollen− (Askese) →Begehren, Wünschen〕
〔der allgemeine Wille (volonté générale) ↔ der besondere Wille〕

第16章　**法（権利）**　Право〔Recht, δικαιον, ius〕
〔Wechsel, Austausch, Gleichgewicht, Reziprozität〕
〔Kampf, Anerkennung, Macht, Gewalt : modus vivendi〕
〔Vertrag−Eigentum−Rechtsordnung−Unrecht〕

第17章　**道徳**　Мораль〔mos−mores, Moralität, Gewissen−der kategorische Imperativ〕

第18章　**習俗規範態（人倫）**　Нравственность〔ηθοϛ, Sittlichkeit : Institutionen〕

第19章　**人格とその徳について**　О личности и её добродетели〔Person, Tugend〕

第20章　**国家について**　О государстве〔Staat, Nation : Gemeinwesen〕
〔Macht・Gewalt/ Regierung・Herrschaft/ Verteidigung/ Souveränität (innen/außen〕/ Verfassung)
〔contribution−redistribution〕
〔wechselseitige Bestimmung von kollektiver und individueller Identität〕

第21章　**人間の限界**　Предел человека〔Grenze des Menschen : absurdes Diesseits〕

第22章　結語　**神義論の危機**　Заключение. Кризис теодицеи〔Theodizee des Elendes〕

文献補足

1ヘーゲルの著作　Произведения Гегеля　2ヘーゲルについての文献　Литература о Гегеле

第14章　人間　Глава четырнадцатая ЧЕЛОВЕК

【「自然」→「人間」（身体・魂・精神=自由）→「神」：〈「精神」の必然的現存様態としての人間〉

«природа» → «человек« (тело-душа ↔ дух=свобода) → «Бог»： человек как необходимый *modus essendi Духа*】

ヘーゲル哲学философия Гегеляをその基本的な本質において理解постигнуть し（究め）ようとする者は、直観的な注意力を凝らして、その「人間」概念 концпция «человека» を開示しなければならない。なぜならば、ここに「精神の哲学」全体все »философия духа» の鍵があるからである。世界のより高次の諸形象образыは、「人間的なるもの」のエレメントэлемент «человеческого» において構成слагаться されている。精神の生（生活活動）の各段階は、それらにおいて人間的な本質存在человеческое существоがその「魂」»душа»と「身体」»тело»を伴って生きて（生活活動を営んで）いる（ところの）諸法則や諸形式に、なによりもまず従っている。法（権利）право、習俗規範（人倫）нравственность、国家государство、歴史история、芸術искусство、宗教религия、これらは、〈人間の真の実体を構成しているところのもの〉の諸々の特殊な様態変容особые видоизменения того, что составляет подлинную субстанцию человекаとしてのみ、理解されうる。〈人間は、自然природаからは抜け出していたが、いまだ自己の絶対的な自由своводаを実現（現存化）осуществитьしていなかった大文字の「精神」»Дух» の、必然（不可避）的な現存様態необходимый modus essendiである〉。

人間の真の実体（基体）的な本質подлинная субстанциальная сущность человекаを構成составлятьするのは、その「魂」»душа»、あるいは、ヘーゲルが通常そう表現しているように、「精神」»дух» である。

【自然の目的としての人間の精神：人間の形象においてのみ「身体性（物質

性）と可視的な表現を受け取る精神」

«дух» человека как цель природы : Дух, полчающии только в образом человека «телесность и зримое выражение»】

人間の「精神」человеческии «дух»[1]は、自然の最高の成果иток、自然の創造создание、自然の王冠венецである。それ（人間の「精神」）は、自然の目的[2]цель природыであり、この目的のためにすべての自然的な諸過程естественные процессыは完遂されるсовершаться。それ（人間の「精神」）は自然の真実態[3]истина природыである。この真実態は、世界のあらゆるより低次の諸段階によって苦しみ抜かれた末に掴まれたвыстраданнаяのであり、最後に、それらの諸段階を斥けотвергнувшая、そして、それらを抜け出してвышедшая、自由свободаへと至った。自然は、「フェニックスのように、自己を焼き尽くす」[4]»сожигать себя, как феникс»。そして、魂душаは、この業火を抜け出して、生（生活活動）жизнь の中に踏み入る。自然の絶対的、最終的な目的は、すでにこの業火の諸限界（境界）пределыの向こうにある[5]。人間の魂человеческая душаは、存在の新たな方式(条件)новый способ бытияである。それは、落雷удар молнии や覚醒пробуждение ото снаのような[7]、自然における「精神」の本物の奇蹟的な現象чудесное явлениеである[6]。諸事物の世界を照らし出す光は、「内的な」形象*внутренний* обрасによって輝きだし[8]、そして、「神性」Божествоは生（生活活動）の自己の方式（条件）способを一新обновлятьする[9]。「精神性」»духовность» は、「理念」により相応しい（値する）[10]、生（生活活動）の最高の様態высший способ жизни, более достойный Идеиである。というのは、「精神」Дихは、あらゆる諸関係において、自然に優っているからである。魂душаは、邪悪や堕落зло и падениеに道を踏み迷っても、それでもなお、植物の生（生活活動）や宇宙の運行よりも、より高次なものであるからである[11]。それどころか、「世界の諸形象」の間で、人間の形象は、もっとも高次かつ真実なるものである。というのは、そこ（人間の形象）においてのみ、「精神」Духは、「身体性（物

質性）と可視的な表現」»телесность и зримое выражение» を受け取っているからである。[12)]

【全ての〈外的なもの〉に対立する〈内的〉原理（思弁的「概念」の現存化）としての人間の魂＝身体において自己解放を創出する「概念」

душа человека как начало *внутреннее* в противоположность всему внешнему (существование спекулятивного Понятия) = Понятие, творящее в теле своё освобождение】

「自然」»природа»に対する「精神」»дух» のこの優位 преимущество は、[13)] まさに次の点に存する。すなわち、魂 душа はあらゆる外的なものに対立する〈内的な〉原理 начало *внутреннее* である、という点に。魂は、そもそも（即自的に）сама по себе、身体的でも、感覚的でも、[14)] 物質的でもない。[15)] 魂は見ることも、聴くことも、触知することもできない。魂は、両眼からは隠された、〈生きている力〉であり、大文字の「概念」Понятие に特有な、より高次の精神的な理念性による、〈理念的〉な[16)]力である。まさしく、このように、人間の魂についても表象しなければならない。魂は、「現存する大文字の概念」、あるいは、同じことであるが、「思弁的な概念の現存化」である。[17)]「われわれが魂と名づけているものは、（身体（物体）тело において自己の解放 освобождение を創出する）大文字の「概念」である」。[18)] 大文字の「概念」は、そこ（身体、物体）において[19)]実現されたのであり、そして、それ（身体、物体）を克服 побеждать する。

【人間存在の二面性 ＝ ①身体（物体）、有限的、個体的、②精神、無限的、超個体的：〈感覚的なもの〉と〈思弁的なもの〉との中間（媒介）— 人間の魂

двусторонность человеческого существа = ① тело, конечное, индивидуальное, ② дух, бесконечное, суверхинидивидуальное : человеческая душа как средина (среда) между чувственным и спекулятивным】

勿論、魂は、大文字の「概念」として、〈その（「概念」の）能力 мощь と

〈その〉価値（威厳）достоинствоを有するが、しかし、〈現存する〉大文字の「概念」существующое Понятиеとしては、それ（魂）は〈経験的な現存性と被制限性 *эмпирическое бывание и ограниченность* に関与（関係）*причастить* している〉。人間は「世界の形象」»образ мира» である。人間は〈活動現実的〉*действителен* であり、それゆえに、かれの本質существоは〈二重の〉成因составを有する。一面では、魂は、身体（物体）とのきわめて緊密な繋がり（結合）связьを伴って、身体（物体）から自己の内容を受け取りながら、生活活動を営んでいるжить。他面では、魂は身体（物体）から自己を解放しうるし、そして、自己表現свое выразжениеのための他の「言語」»язык» を発見しうる。一面からは、魂は、制限され、有限化され、個体化されている。他面からは、魂は、無限的、超個体的、客観（客体）的である。魂は、感覚的なものчувственноеと思弁的なものспекулятивноеとの間を媒介する何らかのものнекая срединаである。それは、あたかも二つのエレメントの妥協компромиссと「共生」»сумбиоз» であるかのようである。実のところ、それ（魂）は、自己の眼前に、身体телоと「精神」»Дух» とに向かう二つの路を有して、いつまでも岐路распутьеの上に屹立しているのである。

【身体と精神の統一性 ＝人間の目的（意義）

единство тела и духа ＝ назначение человека】

ヘーゲルは、人間の本質のこうした〈永久の両面性（相互性）〉*вечная двусторонность* の中に、その〈運命〉*судьба* を見ている。〈人間の目的（意義）*назначение* は、この両面性（相互性）を統一性*единство* へと齎すことである〉。人間を論ずるтрактовать（解釈する）「哲学」の課題は、人間の生（生活活動）を〈自由への統一的な奔流（流束）*единый поток*〉として究明（理解）постигнуть することである。

【動物（感覚、欲求、必要）かつ精神（自由、思惟、自己意識）としての人間

человек как животное (чувство, желание-стреление, необходимость-

надобность) и дух (свобода, мысль, самосознание)】

かくして、人間は〈二重の〉自然本性 *двойная* природаを有している。「一面からいえば、われわれは、人間を・・・地上の時間性の囚人пленник земной временности として、見ている」。人間は、「諸々の自己の要求や必要に圧迫угнестиされ、自然に抑え込まれ（圧伏され）、諸物質、感覚的な諸目的、諸享楽に縛られ（絡め取られ）、諸々の自然的な愛着や激情に隷属させられ、それらに夢中увлечьにさせられ（惹きつけられ）ている。他面からいえば、人間は、永久の諸理念へと、思惟と自由との帝国（支配）царство мысли и свободыへと、引き上げられ、自己に、意思волиとして、普遍的な諸法則や諸限定（規定、定義）всеобшие законы и определенияを与え」[20]、そして、そのことで、自己の精神性духовностьを確認утверждатьする。一面からいえば、人間は動物хивотноеであるが、しかし、自己の動物的な諸機能функцииにおいてさえ、それらの上で（動物がそうするように）何か本質的なものсущественноеの上でそうするように[21]は、立ち止まらずне останавливаться、「それらを意識осознатьし、それらを認識познатьし」、そして、そして、自己意識самосознаниеへ上昇（遡及）восходитьする[22]。「かくして、人間は自己の…直接無媒介性 непосредственность という限界を取り去り、動物的であることをやめる。まさしく、人間は、人間が動物である、ということを〈知っている *знать*〉からである。かくして、人間は自己を精神として認識 познатьしている」[23]。

【人間が活動現実的であり、そして、自己を解放する世界形象であるために、人間にとって不可欠である、人間の身体的存在と精神的存在における〈欠如性〉（自然的必要と外的必然（不可避性）＝感覚的・経験的な要因）*недостаточность* в телесном и духовном бытии человека (естественная потребность ивнешная необходимость) = чувственно–эмпирическое, которое необходим человекудля того, чтобы он действительным и освобождающим себя образом мира】

人間は空間と時間の中に制限されている。人間はちっぽけな細片малая частица以上のものではなく、人間の外部には、あらんかぎり無限の延長протяжённостьが留まっている。人間の生（生活活動）が続くのは束の間の時間небольшой промежуток времениであり、この時間は、無限の時間と比較すれば[24]、一瞬мигとして現象する。人間は、あらゆる面からして、有限性конечностьに縛られて（絡め取られて）いる[25]。人間自身は、それによって人間が生きる（生活活動を営む）ところの内容が「直接無媒介的に与えられた」内容であるかぎりで、有限の精神として現象する[26]。人間に、その身体的存在と精神的存在[27]とにおける欠如性（不完全性）»недостаточность»（Mangelhaftigkeit）が固有であるかぎり、人間は、かれが地上の生（生活活動）を営む間、この欠如性に立ち戻る（帰還する）ことを強いられている。人間は、「内的なものそのものにおける、純粋な思惟における、諸法則と普遍性とにおける、生（生活活動）に耐えないне мочь выдержать」。人間は、感覚的な現存чувственное бывание、感情чувствование、諸々の心情的な動きсердечные движения、諸々の魂の気分душевные настроения、等々を、必要としている」[28]。人間は、地上的な現存態の「諸矛盾」»противоречия» земного существования全てを――「飢えгород、渇きжажда、疲れутомление、飲食еда и питье、飽食сытость、睡眠сон、等々を」――経験しなければならない[29]。というのは、こうしたことを通じて、人間は「活動現実的」»действительный»になるからである。「精神が自己の活動現実性действительностьを獲得するのは、次のことによってのみである。すなわち、精神が自己を自己自身において二分し、自己に、諸々の自然的な必要потребность」と外的な不可避（必然）性необходимостьとの「形姿で、限界пределと有限性конечностьとを伝え」、それから、「それらの中に浸透проникать し、それらにおいて自己を展開себя врабатывать しながら、それを征服преодолевать する」、ということによってのみである。こうしたことにより、精神は自己に客体（客観）的な現存существованиеを付与する[30]。感

覚的・経験的な成因чувственно-эмпирический составは――外的な成因（諸事物の中の一事物としての身体дело）と内的な成因（非合理的な諸状態の一体系としての「魂」»душа»）は――人間が〈活動現実的〉で、かつ〈自己解放的〉な、世界の形象であるために、人間にとって不可避（不可欠）である。

【人間の運命としての感性と理性（悟性）、身体と精神：「人間は、自己の生活活動において、〈すでに自由であり、いまだ自由でない〉」：「概念」そのものの様態としての人間の精神

чувство и разум, тело и дух как судьба человека: «человек в своей жизни *уже свободен и ещё не свободен*»: дух человека *как модус самого Поняия*】

人間の運命судьбаは、次のことによって決定されている。すなわち、人間は、感性чувственностьと理性（悟性）разум、身体телоと精神дух、これらから成立している、ということから[31]。このことは、次のことを意味している。すなわち、人間は、その生（生活活動）において、「世界の諸形象」全てと似て、〈すでに自由であり、かつ、いまだ自由ではない〉、ということを。精神と理性は、人間の存在（本質）сущностьを構成составлятьしている。したがって、人間は、自己の根源корень において、絶対的な自由に関与している。しかし、人間の理性（悟性）разумは感性чувственностьに結びつけられている。そして、おそらく、人間の力は、潜在的にのみ、深淵において輝いているにすぎない。そして、精神は身体に結びつけられている。そして、おそらく、人間は、いまだなお人間の因循（怠惰）косность を隷属させることに成功していない。人間の目的（意義）назначениеは、絶対的自由の火花（閃光）искраを、完全で、輝かしく、全てを包み込む炎пламяへと燃え立たせることである。そして、この解放освобождениеは、遅かれ早かれ、人間に保障されている。なぜならば、〈人間の精神は「概念」自身の様態である〉*дух человека еисть модус самого Понятия* からである。

【神の霊媒としての人間（神を直観していた人間）の認識 — ① 人間によって認識された神性は人間の固有の自然本性であり、そして、②人間が神を認識したのではなく、〈神が人間において自己自身を認識した〉ということが、人間に開示されている、ということ。

познание человека как медиум (человек, увидавшии Бога) — что ① познанная им божественность есть «его собственная природа» и ② ему открывается, что не он «познал» Бога, а *Бог в нём познал сам себя*.】

まさしく、大文字の「概念」Понятиеとして、人間の魂душа человекаは、「単純な精神的実体」»простая духовная субстанция»[32]であり、人間の、そして、人間の生（生活活動）の、「基礎」»основа»である[33]。人間の魂は、「単純な普遍性であり」»простая всеобщность»自己の全ての諸状態と諸限定との具体的な全体性（総体性）конкретная тотальность всех своих состояний и определенийである[34]。大文字の精神Духによって遂行される全ての特殊化обособлениеは、諸々の唯一の諸限定[35]への精神の全ての下降нисхождениеは、「絶対的な基礎」としての魂から成長し、そして、自己の絶対的な水準уровень としての、魂のエレメントэлемент душиに、留まっている。人間の形象образ человекаは、自然的な「骨格（骨組）」естественная »материатура»〔materiatura〕[36]を、大文字の「精神」の神的な深淵божественная глубина Духаと結合する。〈人間の魂の根源は神的である〉*Корень человеческой души божествен*。しかも、神は、直観（観照）созерцаниеと思惟活動мышлениеにおいて、人間に啓示открывать されるから、というだけでなく、そして、そのかぎりにおいて、というだけでなく、〈神は現実に人間において活動действовать し、そして、人間を通じて、自己を実現（現存化）осуществлять する。〉[37] 人間は、自己の中に、より強力で創造的な臨在（所在）творческое присутствиеを隠している、神の〈霊媒（巫女）〉[38]»медиум» Богаである[39]。人間の最深の自然本性は、即自的に（そもそも）самопо себе、そして、第一に、神性божественностьに関与している[40]。そして、人間の課題は、この自

然本性を、外的並びに内的な他在инобытиеから解放する、という点に存する。[41] 神を直観していた人間человек, уведавший（увидавший）Богаは、次のこと（①、②）を認識познатьしたのである。すなわち、①人間によって認識познатьされた神性は「人間の固有の自然本性であり、[42] そして、②人間が神を「認識」したのではなく、〈神が人間において自己自身を認識した〉、ということが、人間に開示（啓示）されている、ということを。[43]

【他在のエレメント（自然性、感覚性、現存性）を含む、人間の生活活動の意味（活動現実性：習俗規範性、国家、芸術、宗教、哲学）— 魂の諸エレメントの様態変容

смысл человеческой жизни (= действительность : нравственность, государство, искуство, религия, философия), который включает в себя элемент инобытия (природность, чувственность, существание) — видоизмение душевной стихии】

人間の生（生活活動）の意味смыслについての、習俗規範（人倫）нравственность、国家государство、芸術искусство、宗教религия、哲学философияについての、ヘーゲルの全ての教説は、こうした基礎的な概念（構想）концепцияを通じてのみ、開示されるраскрываться。存在のこうした全ての諸領域は、こうした全ての世界の諸状態は、〈魂の〉諸エレメントの様態変容видоизменение *душевной* стихииであり、したがって、それらは同時に「人間的かつ神的」である。このことは、次のことを意味しない。すなわち、それらは、「自然性」»природность»、「感覚性」»чувственность»、「現存性」»существование» から自由である、ということを。それらの「活動現実性」»действительность» は、すでに自己の中に他在のエレメントэлемент инобытияを組み入れている。[44] しかし、このことは、次のことを意味している。すなわち、ヘーゲルはそれらの中に神の生（生活活動）の純正な（本物の）諸段階を見ている、ということを。

【ヘーゲル哲学と経験的心理学との差異

различие между философией Гегеля и змпирической психологией】

ヘーゲルが世界の最高の諸形象について語っていることの全ては、かれが基本的に〈人間の中に神を探究していること〉его *основное искание Бога в человеке* によって、限定されている。魂についてのかれの教説は、材料を経験的な諸観察から引き寄せていることが稀でないにもかかわらず、経験的な心理学эмпирическая психологиясを呈示していない。かれが「魂」について語っているときでさえ、かれがそれで謂っているのは、〈魂の、基本的な、実体的な、精神的な力〉のことなのである。心理・生理学的なпсхофизиологические諸現象について語りながら、無意識的なものの生（生活活動）の中に浸透しながら、人びとの直接無媒介的な社交（相互行為）непосредственное общение людейとかれらの直観的な一体性 инстинктивное единениеとを検証рассматриватьしながら、ヘーゲルが視野に入れているのは、経験的な充溢эмпирическая порнотаや対象の多様性многообразие предметаではなく、「肝要なこと」»главное»、すなわち、〈探究されているものの思弁的な性格と思弁的な合目的性〉*спекулятивный характер и спекулятианая целесообразность* исследуемогоだけである。「魂」の生（生活活動）の中で、こうした「肝要なこと」が開示されているならば、ヘーゲルは〈自己の対象〉を見出し、「概念」の現前（現存）наличность Понятияを確証утверждатьしているのである。その「肝要なもの」が発見されていないならば、哲学は自己の対象を見出して〈いない〉のであり、そして、諸々の自己の確証において、〈端的に〉、この「純粋に経験的な」材料 »чисто эмпирический» материалを〈視野にいれていない〉*не иметь в виду*のである。

【ヘーゲル哲学の対象＝〈理性的なもの〉・〈神的なもの〉（精神）の勝利・自由

предмет философии Гегеля ＝ победа, свободо разумного — божественного (Духа)】

その個人的な生（生活活動）と社会的な生（生活活動）について語りなが

ら、ヘーゲルが視野に入れているのは、〈「理性（合理）的なもの」*»разумное»* と神的なもの *божественное* だけ〉である。かれの哲学が理解 разуметь しているのは、「活動現実性という十字架」»крест действительности» において咲き誇る「薔薇」»роза» расцветшая だけである。その哲学が語るのは、精神の勝利について、その勝利の諸条件について、その勝利の諸過程と諸成果について、だけである。ヘーゲルのパトスは пафос Гегеля 全て、〈精神＝勝利者〉*Дух=победитель* に捧げられている。〈かれはその諸敗北 *поражения* について哲学 *философствовать* することなく〉、それらに、通りがかりでのみ только мимоходом、それらの改善（修復 поправимость）という程度でのみ、触れるにすぎない。それぞれの対象において、ヘーゲルが探求 искать しているのは、見るべくかれに与えられているもの того, что ему дановидеть だけであり、かれは、かれが探求したもの то, чего он искал だけを、見ているのである。そして、かれに開示されているものは、〈「精神」の勝利と自由 *победа и свобода Духа* であり、かれはこれを＜肝要なもの、本質的なもの〉として как *главное и существенное*、〈第一の実在（現実）として〉*как перво реальность*、確証 уверждать している。ヘーゲルは、自己のもっとも基本的な構想（ヴィジョン）видение において、〈オプティミスト（楽観主義者）〉*оптимист* である。

【思惟活動＝解放＝思惟されたことの理性性（理解力（意味）の思弁的エレメント）の開示、主体と客体の同一性（「概念」）の回復

помыслить = освободить = раскрыть разумность помысленного (спекулятивная стихия смысла), восстановить тожество субъекта и объекта (Понятие)】

しかし、かれのオプティミズム（楽観主義）が根拠としているのは、主観的な魂の平衡 субъективное душевное равновесие、そして、素朴（ナイーフ）な、あるいは偏屈な（制限された）、素晴らしい魂（おめでたい夢想）наивное или ограниченное прикраснодушее ではなく、意識的で、哲学の本

質に依拠した原則的な見解принципиальное воззрение である。ヘーゲルは、悪зло を見据えている взирать 以上、盲目であるわけではないし не слепнуть、悪が全く存在し〈ない〉、と確信 утверждать しているわけでもない。かれは探究されている対象を「理想化（理念化）」»идеализировать» してはいないし、対象が実際にそうであるよりも、よりよく「形象化（描出）」»изобразить» しようとしているわけでもない。しかし、経験的に与えられたもの（所与性）эмпирическая данность の多くの形象の中で、かれは、〈何もかもを〉、哲学の対象として認知（容認）признать しているわけでは〈ない〉。〈理性が開示し認識しなければならないのは、理性的であるところのものだけである〉。*Разму надлежит раскрывать и познавать лишь что разумно.* これが、かれの基本的な確信 убеждение である。すべてのものが、理性 разум に、そして、理性の思惟する力 мыслящая сила に、не достойно 値するわけではない。というのは、思惟すること помыслить、これが意味しているのは、解放すること освободить、思惟されたことの理性性（合理性）を開示すること раскрыть разумность помысленного、主体と客体の同一性を回復すること восстановить тождество субъекта и объекта、こうしたことであるからである。しかし、こうした同一性は、「概念」（客体）Понятие（объект）と「概念」（主体）Понятие（субъект）との間にのみ存立 состояться しうる。ヘーゲルは、〈理解力（理性、意味）の思弁的なエレメント *спекулятивная стихия смысла* ではないところのもの〉を吟味（検討）расматривать することを、〈原則的に拒絶 *отказываться* している〉。かれは「他在」»инобытие» を否認 отрицать している。存在論的に онтологически ではなく、〈認識論的に〉*познавательно*、ではあるが[45]。〈具体的・経験的なもの〉конкретное-эмпирическое そのものは、哲学に値する対象ではない。感覚的なエレメントが吟味（検討）されうるのは、「概念」に対して自ら従属している своя покорность Понятию かぎりにおいて、すなわち、その感覚的なエレメントが「理性の形象を帯びている」»образумиться» かぎりにおい

て、にすぎない。まさにこうした〈認識論的な貴族主義（アリストクラティズム）〉*познавательный аристократизм* こそが、ヘーゲルを、かれの意識的かつ原則的な〈楽観主義（オプティミズム）〉сознательный и принциальный оптимизмへと導いているのである。

【非合理的なエレメントの比重（その現実的力と精神的意義）の貶価：具体的・経験的なものが有している自存性と影響力の理論的・実践的な無視

недооценка удельного веса (её реальной силы и духовной значительности) иррациональнои стихии : теоретическое и практическое игнорирование тои самобытности и того влияния, которые конкретное-эмпирическое имеет.】

〈対象的なヴィジョン（対象の見方）〉*предметное видение* のこうした原則的な〈楽観主義〉приципиальный *оптимизм предметного видения* は、二つの危険性опасность を有している。

第一の危険は、〈対象的な〉*предметный* 性格を有している。この危険は、次の点に存している。すなわち、〈理性的（合理的）なものразумное〉だけを認知(容認)признать する哲学は、非合理的なエレメントの比重をудельный вес иррациональнои стихии——そのエレメントの現実的（実在的）な力реальную силуと精神的な意義духовная значительность を——貶価недооценить する、という点に。この危険性は、〈具体的・経験的なもの〉の完全な非本質性の容認（認知）признание полной несущественности конкретного эмпирическогоへと、したがって、その〈具体的・経験的なもの〉の自存性と影響力самобытность и влияниеの理論的かつ実践的な無視теоретическое и практическое игнорирование へと、導かれかねない。

【お馴染みの諸術語の背後に隠されている全く独自の意味の誤解：定常的な四術語の可能性の構成

недоразумение совершенно своеобразного значения, которое скрывается за привычными терминами : устройство возможности постоянного qua-

ternio terminorum, которые взаймно определятся】

第二の危険性は、〈術語論的な〉性格*терминологический* характерを有している。その危険性は、次の点に存する。すなわち、特殊で独特な諸対象を表示するために、通常の普及した諸術語を用いる哲学者философ, пользуясьобычными и распространенными терминами для обозначения особых, своеобразныхпредметоはは、自己自身を、ではないにしても、あらゆるケースにおいて、他の人たちを、誤解недоразумениеに導いてしまうリスクを負う、という点に。ここには、定常的な四術語quaternio terminorumの可能性が形成されている。ヘーゲルを研究している思想家が、お馴染みの諸術語の背後に隠されている〈全く独自の〉*совершенно своеобразное* значение意味を忘れるだけで、そのたびに、それ（誤解）が起こってしまうосуществляться。ヘーゲルが、「人間」»человек»、「魂」»душа»、「法（権利）」»право»、「習俗規範（人倫）性」»нравственность»、「国家」»государство»と呼んでいることは、こうした諸術語に取り組んで（係って）いる人たちが通常理解разуметьしていることとは、まったく一致しない。このことを視野から外してしまうや否や、誤解недоразумениеは誤解の上に積み重なりгромоздиться はじめる。

【〈具体的・経験的なもの〉の理性性（光）と反理性性（影、陰）

разумность (свет) и противоразумность (тень) конкретного-эмпирического】

もちろん、この危険は哲学者自身をも脅かしかねない。そのときは、この第二の危険は、第一の危険と一つに合流сливаться する。具体的な経験の貶価と無視недооценка и игнорированиеは、哲学者（プラトンやヘーゲル）を、次のことへと導きかねない。すなわち、哲学者は、〈通常の卑小な〉意味と尺度*обычный и малый* смысл и масштабにおける「法（権利）」»Право»、「習俗規範」»Нравственность»、「国家」»Государство» がある иметься にすぎないところで、〈特殊な〉意義*особое* значениеにおける「法（正義・権利）」、「習俗規範（人倫）」、「国家」について語ることになるであろう、と

いうことに。このような可能性は、とりわけ次のようなときに、現れる（明らかになる）。すなわち、哲学者が、〈個体的なもの〉*индивидуальное*、〈唯一（稀有）のもの〉*единичное*、おそらく、〈歴史的に〉与えられたもの *истшрически данное*、〈世界（世俗）の現象〉*мировое явление* ——これらの「理性性」»разумность» は哲学者には開かれているが、これらの「反理性性」»противоразумность» はかれにとって影тень の中に留まっている——これらに取り組むときに。こうしたことは、次のように表現しうる。すなわち、ヘーゲルは、かれの認識論的な貴族主義 аристократизм と楽観主義 оптимизм によって、いつも、唯一の世界（世俗）的な「現象」を、現存化した世界の「形象」осуществивший мировой «образ» と見做すことになりうる、と。この場合、〈思弁的明察と哲学者的遠視〉*спекулятивное ясновидениеи и философская дальнозоркость* と は、〈経 験 的 近 視〉*эмпирическая близорукость* の形式として受け取られ、哲学者を孤立無援と混乱 беспомощность и заблуждение とへ導くであろう。誰にも知られていることであるが、ヘーゲルは、プラトンもまたそうであったように、政治の諸問題において、こうした危険を免れなかった。

【活動現実性＝理性性：活動現実的なものの本質としての理性的エレメント — 絶対的善（理性）の探求

действительность = разумность : разумный элемент как сущность действительного – исследование абсолютного блага (разума)】

対象へのヘーゲルの基本的な接近（アプローチ）подход の本質は、以下の如く定式化 формулировать されうる。〈かれは活動現実性をその理性性（合理性）の程度においてのみ探究し、理性的（合理的）なエレメントを活動現実的なものの本質として確信している〉*он исследует действительность лишь в меру её разумности и утверждает разумный элемнт как сущность действительного* と。これは、かれが、「不完全なもの」»неповершенное»、「醜悪なもの」»дурное»、「背徳的なもの」»порочное»について、要するに、

地上での神の顔（かんばせ）（人格）лик Божий を歪める искажать ものについて、語ることを好まない理由である。これは、かれが、「弱きもの」»слабо»、「病むもの」»болезненно»、「不幸（悲惨）なもの」»несчастно»、〈具体的・経験的なもの〉の混沌 хаос に服 поддаться し、「諸々の環境」»обстоятельство» の中に救いがたく絡めとられた запутаться もの、こうしたものすべてに、通りすがりに мимоходом しか触れない理由である。ヘーゲルは、〈絶対的な善〉（〈理性〉）の道程 путь *абсолютного блага (разума)* を探究し、その中に、〈絶対的な力〉を見ている。「人間」»человек» と「国家」»государство» は、かれにとって、神の自己解放のこうした系列において形成された（成熟した）〈諸形象〉*образы,* сложившиеся в этом ряду самоосвобождения Божия である。

【人間（神）の〈自己解放〉過程：主観的、客観的、絶対的な〈精神〉の諸段階：〈苦難〉を通じての成熟

процесссамоосвобождения человека (Бога): этапы субъективного, объективного иабсолютного *духа*: созревание через *выстраданность*】

〈人間の中に隠された神的な力に惹かれて（魅惑されて）いる人間〉が如何にして〈絶対的な自由へと上昇（遡及）するのか〉как *человек, увлекаемый скрытой в нем божественной силой*、*восходит к абсолютной свободе*、このことを描出 изображать しながら、ヘーゲルは、この過程において、三つの大きな諸段階に、すなわち、「主観的な精神」の段階、「客観的な精神」の段階、「絶対的な精神」の段階に、区分 различать している。これらのステップは全て、「人間の魂」のエレメントの中に在り続ける прибывать。それらは、おのずから、〈自己の本質において神的に有意味な、そして、自己の現象において、有限で経験的な、内的で非物質的な、人間の活力（エネルギー）〉の、諸状態 состояния *внутренней, немателиальной энергии человека, божественно-смысловой по своей сущности, и конечно-эмпирической по своему явлению* を、呈示 представлять する。これらの諸段階のそれぞれは、一定程度の精神的な自由 духовная свобода を現存化 осуществлять してい

る。こうした精神的な自由は、思弁的な法則にしたがって、後になって消えてしまわないだけでなく、さらなる発展развитиеに不可欠なエレメントである。後続する段階の内容は、先行する段階における苦難を経て成熟した水準においてのみ、開示されうるсодержание последующего этапа только и может раскрыться на уровне, выстраданном и созревшем на предшествующей ступни においてのみ、開示されうる。「主観的な精神」の熟した結果зрелый итокは、「客観的な精神」のexistenz-minimum（最低限の現存態）であるが、後続する（最後の）もののより高次の達成высшее достижение последнегоは、「絶対的な精神」にとっては不可欠の、生（生活活動）の大気圏атмосфераである。

【（1）主観的精神=即自的·直接無媒介的な〈理性的意思〉—自己の魂とその身体の間の、魂の諸能力とその諸様態の間の、〈有機的な同一性〉の確立：「精神」の「思弁的個体発生」— 法権利、道徳、習俗規範、国家の創出

（1）субъективный дух = сама по себе непосредственная *разумная воля*: установление *органического тожества* между собою душой и своимтелом, и между своим способностями и состояниями души: «спекулятивный онтогенезис» Духа — создание права, морали, нравственности, госдарства】

精神の道程のこうした〔主観的、客観的、絶対的という〕基本的な分割делениеは、以下のような形をとる。第一のステップにおいて、精神は「主観（主体）的」である。このことは、次のことを意味する。すなわち、精神は〈単一（唯一）の魂〉*единичная душа*という形式を有しており、こうした魂は、自己の諸状態の中に〈（錠で）閉ざされて〉замкнутおり、そして、精神に直接無媒介的に「与えられている」»даться» あるいは課されているнавязываться内容содержаниеに（鎖で）繋がれているприкованнとということを。こうした状態では、「魂」»душа» は、自己の精神的な自然本性について、そして、魂に与えられた、見かけでは「疎遠な」内容の、理性（合理

性）разумностьについて、いまだ如何なる概念понятиеも有していない。魂は、固有の経験によってсобственным опытом、一方のことも、他方のことも、確信убедитьしていなければならない。すなわち、受動的に受け取られている自己の諸内容の総容量весь обём своих, пассивно воспринятых, содержаний を〈自己のものにし〉*усвоить* なければならないし、そして、それらにおいて自己を、しかし、自己においてそれらを、〈解放〉*освободить* しなければならない。したがって、魂は、〈総じて〉精神であるところのものに対して自ら刮目себе глаза открыть しなければならないし、そして、〈自己の〉精神性духовность と理性（合理性）разумность を認識признать しなければならない。「精神」のこうした「思弁的な個体発生」»спекулятивный онтогенезис» において、魂は、自らについて次のように語る。すなわち、「わたしはわたしの身体とわたしの内的な諸内容の基体（実体）である」»Я есмь субстанция моего тела и моих внутренних содержаний» と語り、そして、事物において、言われていることна деле сказанное を、現存化осуществлять する。魂の解放освобождение души は、次の点に存する。すなわち、魂は、第一に、自己と自己の身体との間の、そして、第二に、自己の多様な諸能力と諸状態способности и состояния との間の、〈有機的な同一性〉*органическое тождество* を確立устанавливать する、という点に。こうした闘争борыба の最後に形成される成果итог は、魂に、自己について、次のような可能性を与える。すなわち、①「わたしは、精神дух であり、すなわち、すでに、わたしの主観（主体）的な諸限界пределы において自由である理性的な意思разумная воля であるが、しかし、いまだ、他の身体的な諸事物や精神的な諸本質に対する関係отоношение к другим, телесным вещам и духовным существам においては自由ではない」、と語る可能性を、そして、②その後で、より高次の〈客観（客体）的な〉自由の開示раскрытие へと移行перейти する可能性を、与える。このことは、次のことを意味している。すなわち、〈理性的な意思〉*разумная воля* だけが〈主観（主体）的な精神の

成熟した成果зрелый итокであり、そして、それ(理性的な意思)だけが、「法(権利)」»право» と「道徳」»мораль»、「習俗規範態(人倫)」»нравственность» と「国家」»государство» を創出создатьしうる、ということを。

【(2) 客観的精神：〈「精神」の思弁的系統発生〉：①生活活動の自然的諸条件の科学的、技術的、経済的克服、②人々の見かけの隔絶状態の習俗規範的・政治的な克服 — 国民的な精神における主体と客体〔自然と人間、人間と人間〕の有機的一体性（同一性）の成立：「国家」において成熟した「国民」の精神（芸術、宗教、哲学）

(2) объективный Дух：*спекулятивный филогенезис Духа*：①научное, технический, и экономический преодоление природных условияхжизни, ②нравствнное и политическое преодоление изолированности людей — возникновение органическоиединства (тожества) субъекта и объекта (природы и человека, человека ичеловека) в народным духом：созревший в «государстве» дух «народа» (искуство, религия, философия)】

〈第二の〉ステップにおいて、精神は客観（客体）的である。これは、次のように理解понимать すべきである。すなわち、魂は、自己において自己の諸状態を克服победить し、自己を内的に解放освободить してから、世界における自己の現存化существованиеの〈外的な諸条件〉*внешние условия* に向かい、それら(の外的諸条件)と、〈自由のための闘争の過程〉*процесс борыбы за свободу* を、結合завязывать する、というように。魂は、もはや自己の諸限界の中に閉じ込められてはいないне замкнутаが、しかし、〈求心的な〉活動を展開*центробежную* деятельность развивать する。魂は、すでに、〈精神とは何か〉、についての概念понятиеを有し、〈「他在」»инобытие» の中に、他の人たちの中に、そして、自己の生（生活活動）の自然的な諸条件*условия* の中に、精神性*духовность* を探求*искать* する〉。魂は、次のことを確信しなければならない。すなわち、全ての「所与」は、魂にとって精神的であ

る、ということ что всё «данное» ей духовно を。〈そのものが精神である〉という意味においてであれ、〈精神の召命 *зов* や命令 *веление* に従属させられうる *может быть подчинено*〉という意味においてであれ。「精神」のこうした〈思弁的な系統発生〉 *спекулятивный филогенезис Духа* において、魂は、〈自己を〉、第一に、「理念」Идея の最低次の自然的な諸ステップとの繋がり связь の中に、見る。それら（の諸ステップ）を、学問（科学）的に、技術的に、経済的に、征服 побеждать して、魂は、それらの見せかけの自存性（独立性）самобытность から、自己を解放 освобождать する。第二に、無限定の多数の人びとから〔魂は自己を解放する〕。かれらからの自己の見かけの隔絶（孤絶）状態 видимая оторванность を、習俗規範（人倫）的かつ政治的に克服 преодолевать して、魂は、自己の見かけの孤立状態 мнимая отъединённость を一掃 ликвидировать する。こうしたことは、同時に、自己の内的な諸内容を、新たに変換 переработать することを、自己の絶縁（遊離）状態 изолированность を克服 преодолеть することを、深淵 глубина にまで、すなわち、〈超個体的（超個人的）な、類的な、そして、実体（基体）的な、大文字の「普遍性」の水準 *уровень сверхиндивидуальной, родовой и субстанциальноц Всеобщности* にまで〉、下降 опуститься してゆくことを、魂に強いている заставлять。魂の解放 освобождение души は、次の点に存する。すなわち、魂 душа は、第一に、魂と、〈国民的な精神〉の一体性へと共に一体化されている他の人びと другие люди, объединенные сообща в единство *народного духа* との間の、そして、第二に、国民的な精神と、そうした精神の生（生活活動）の自然的な諸条件——これらの諸条件は、そうした精神の従順な標識 покорный знак へと、そうした精神の道具 орудие へと、そうした精神の「身体」»тело» へと、変えられる——との間の、〈有機的な同一性〉 *органическое тождество* を、把捉（理解）постигать し、確認 утверждать する、という点に。こうした水準にまで上昇 вступить してから、精神は、自らに次のように語りうる。すなわち、「わたしは、唯一の精神的

な実体（基体）、有機的な普遍性（一般性）であり、世界と全てのわたしの内的かつ外的な諸内容とを支配する善き強き意思である」、と。そして、これに続けて、〈こうした最高の啓示〉の開示、確認、描出へと、移行しうる。このことは、次のことを意味している。すなわち、「国家」において成熟した「国民」の精神созревший в «государстве» дух «нрода» だけが、「素晴らしい芸術」を創造 создать し、「絶対的な宗教」を育み выносить、「本物の哲学」を開示 раскрыть しうる、ということを。なぜならば、国家によって融合された国民の精神 государственно-спаянный дух нации は、おのずから собою、「客観的な精神」の最高の達成 достижение であり、したがって、「絶対的な精神」の〈最低限の現存態〉existenz-minimum であるからである。

【（3）絶対的精神：「理念」そのもの（唯一の思弁的実在（現実）性としての神的実体（基体））の絶対知＝自己によって自己を思惟し、自己の絶対的な自由を確信する、神的な「概念」

（3）абсолютный Дух：абсолютное знание самой Идей (божественной субстанции как единственной спекулятивной реальности) = божественное Понятие, мыслящое себя само, утверждающое свою абсолютную свободу】

「絶対的な精神」のステップは、第三の、そして、最高の、ステップである。このことは、以下のように理解 понимать しなければならない。すなわち、人間には、最後の〈絶対的な知〉послднее, *абслютное знание* が、すなわち、〈真実そのもの〉の *самой Истины*、〈理念〉そのものの самой *Идей*、一且つ唯一の思弁的な実在性（現実性）としての神的で有意味な実体（基体）の божественной смысловой субстанции как единой и единственной, спекулятивной реальности、知 знание が、開示された、と。人間は「神」を見て、そして、自己を「神」の中に、「神」を自己の中に、見る видеть。人間は、いまや、〈適切に〉人間に与えられた啓示 *адекватно данное ему откровение* を見なければならない увидеть。すなわち、自己の中に、この啓

示の知覚のための真の器官（機関）верный орган для его восприятия を、そして、この啓示の表現と描出のための真の道程 верный путь для его выражения и иззображения を、発見しなければならない。〈こうした適切性の探求〉*отыскание этой адекватности* において、「絶対的な精神」の生（生活活動）жизнь »абсолютная духа» は前進 проходить する。「精神」のこうした〈思弁的な認識（グノーシス）спекулятивный гнозис Духа において、魂は、当初、形象的な観察（直観）образное созерцание や神性の感覚的・外的な描出 чувственно-внешное изображениеs Божества に向かい、そして、「素晴らしい芸術」を創出する。その後、情動的・情緒的な体験 аффективно-эмоциальное переживание や感覚を伴う神性の現存化（実現）чувствующее осуществление Божества に向かい、そして、「啓示宗教」*»религия откровения»* を創造する。最後に、魂は、〈思惟〉*мысль* だけが〈意味〉の〔有意味の〕生（生活活動）に適う器官（機関）орган, адекватный жизни *Смысла* である、ということを理解（把捉）постигать し、そして、「本物の哲学」»истинная философия» において自己を消す угашать。思弁的な認識 спекулятивное знание において、人間はもはや、「神」を見ない、「神」の中に自己を見ない、自己の中に「神」を見ない。人間は、消え、沈黙し、そして、〈呑み込まれ、吸収される〉。そして、経験的な外見において、いまだ「人間の魂」が残っているところでは、実際に、〈神的な「概念」は、自己の絶対的な自由を確信して、自己を自己によって思惟する *божественное Понятие мыслит себя само, утверждая свою абсолютную свободу.*〉。

【「世界」のための創造的な死 —「対象」中への存命中の創造的「自己」消去 творческое умирание для «мира» — прижизненное, творческое угашение «себя» в «предметие»】

人間の本質はこのようであり、世界における人間の道程はこのようである。この道程は、最初の魂の一瞬の煌めき первый душевный проблеск から始まり、そして、人間に、完成において、〈最後の歓喜〉*радасть конца* を

与える。賢人の地上の生は「世界（世の人々）」のための創造的な死である что земная жизнь мудреца есть творческое умирание для «мира»、ということについてのプラトンの教説は、おのずから、ヘーゲルという人物の中に、深い解釈者を見出す。もっとも、次のような差異различиеを伴ってはいるが。すなわち、重心центр тяжестиは、個人的（私的、人格的）な自然死を完遂する行為завершаюшии акт личноц, естественной смертиの中よりも、〈「対象」の中への存命中の創造的な「自己」消去〉*прижизненное, творческое угашение «себя» в «предметие»* の中に、見てとられているполагаться、という差異を。精神の成長рост духаは「他在」からの解放осувобождение от «инобытия» であり、この解放は、精神生理学的な形姿を伴う、生きている個体性の、諸媒介によって、充分に現存化（実現）しうる。ヘーゲルは、人間の自然死をも、実体（基体）的な生（生活活動）の自由への出口выход в свободу субстанциальной жизниとして解釈истолковывать しているが、しかし、この出口を、かれは諸可能性の中の最高のものとは見做していない。自然死は、適切な知адекватное знаниеと〈思弁的・グノーシス的な解放〉*спекулятивно-гностическое освобождение* とに上昇する能力を欠く個人、すなわち、絶対的な精神の領域において生きていない個人、諸制限の中に留まっている〈人間的な〉人間человек *человеческий*、にとってのみ、最高の出口であるであろう。

【神の様態及びその絶対的な力の媒体としての人間

человек как модус Бога и медиум его абсолютной силы】

「客観的な精神」の領域の中に留まる人間は、かれがそれ以上進まず、最高のステップへと上昇しないかぎり、まさしくこのようなものである。「主観的な精神」は、そこで人間の精神が、自然的、動物的な諸現存態の諸々の鎖を振り捨て、成長し、形姿を整える、そういう段階である。「客観的な精神」の領域は、〈自己の人間性を受け取り、そして、自己の人間的な自由を実現する〉人間そのものの全ての生（生活活動）жизнь человека как

такового, *принявшего свою человечность и осуществляющего свою человеческую свободу* を包含охватывать している。人間の魂は、その（魂の）中に本質と意義сущность и значение とを投入полагать して、ここで、〈自己の人間的な生（生活活動）の意味〉*смысл своей человечесой жизни* を、探求し、現存化（実現）する。「絶対的な精神」の諸限界の中で、人間はすでに、次のことを知っている。すなわち、人間の生（生活活動）の中で本質的なことは、まさしく、人間的なこと человеческое では〈なく〉、〈神的なこと〉*Божественное* である、ということを。人間は、神の様態 модус Бога とその絶対的な力の媒体медиум его абсолютной силы にすぎない、ということを。人間において重要なのは、人間ではなく、神人Богочеловек である、ということを。かれ（人間）の召命（使命）призвание は、全ての純粋に人間的なことを消去угасть し、そして、自由な道程を〈神的な啓示〉に開示свободный путь *божественному откровению* открыть することに存している、ということを。

【自然における神の生活活動とそれ（神）自身におけるそれ（神の生活活動）との間を媒介する状態としての、人間の生活活動の本物の意味を、熟成させる客観的精神

объективный дух, вынашивающий истинный смысл человеческой жизни как среднего состояния между жизнью Бога в природе и в самом себе】

これは、何故に〈人間の生（生活活動）の意味〉*смысл человеческой жизни* についての教説において、中心的な場所が、「客観的な精神」の領域に割り当てられなければならないか、この理由である。ここで、人間は、最初に、自己の精神的な外貌（特徴）обличие（обличье）を創出し、そして、自己の使命（任務）назначение についての最初の表象представление を受け取ってから、闘争と苦難борыба и страдание の中に自己の生（生活活動）の本物の意味истинный смысл を見出しобрести、〈自己の自然的な存在と社会的な存在との分離（分断）性 *раздельность своего природного и социального бытия*

に打ち勝ち（を凌駕し）*превозмогать*、「理念」Идеяの分けられた諸部分disjecta membraを、〈全てを抱擁する一つの「実体（基体）」〉*единая всеобъемлющая Субстанияруе*へと、接合（融合）сращиватьする。「主観的な精神」は、〈自然〉の本物の意味を探し出す（発見する）истинный смысл *природы* обнаруживатьが、しかし、「絶対的な精神」は、〈神性〉*Божество*の本物の意味を開示раскрыватьするとすれば、「客観的な精神」は、自然における〈神〉の生（生活活動）と〈神〉そのものにおける〈神〉の生（生活活動）との中間（媒介）的な状態средное состояниеとしての〈人間の生（生活活動）〉の、本物の意味を、熟成вынашиватьさせる。

【経験的・有限的な形式における神的なものとしての人間 ― 悲劇・苦難・自由

человек как Божественное в эмпирическои конечной форме ― трагдия, страдание, свобода】

人間の問題проблема »человека» は、あたかも「活動現実的な世界」の集約化された問題сосредоточенная проблема «действительного мира» であるかのようである。というのは、〈人間は経験的・有限的な形式における「神的なもの」である〉*человек есть Божественное в эмпирической, конечной форме*からである。世界の悲劇の全ての糸や結び目все нити и узлы мировой трагедииは、そこにおいて合致сходитьしし、自己の解決разрешениеを見出す。人間は世界の中心点であり、そこにおいて、神的原理の諸苦難は、自己の頂点に達し、そして、絶対的な自由への出口を見出すстрадания божественного начала достигают своей вершины и находят выход в абсолютную свободу。

原注（第14章　人間）

1）Не следует смешивать «дух»（с малой буквы）как «дух человека» — второй, высший, этап Божия пути в мире, и «Дух»（с большой буквы）как«Дух Божии» — синоним Божества.（「人間の精神」としての（小文字の）精神 — 世界における神の道程の第二の、より高次の段階、そして、「神の精神」—神性の同義語— としての（大文字の）「精神」、これらを混同してはならない）Ср., напр.: Log III. 328. Phän. 531. Aesth. I. 40. Rel. II. 50 и др.
2）Enc II. 695（Z.）.
3）Enc. III. 46.
4）Enc. II. 695（Z.）.
5）Enc. II. 9.
6）Cp. Rel. II. 50.
7）Diff. 268.
8）Enc. III. 46. 47.
9）«das Innerlich-werden des Lichts der Natur»（自然の光の内面化）: Diff. 268.
10）Cp.: Aesth. I. 40.
11）Cp.: Enc. II. 29.
12）Enc. II. 30.
13）Enc. III. 442.
14）Enc. II. 475.（Z.）.
15）Enc. III. 166–167.
16）Cp.: Enc. II. 552. Enc. III. 43.（Z.）. 237（Z.）.
17）"die Seele ist der existierende Begriff, die Existenz des Spekulativen"（魂は、現存する概念、〈思弁的なもの〉の現存態である。）: Enc. III. 150.
18）Beweise . B. 475; cp.: Enc. II. 693. Log. III. 250. Aesth. I. 141. 155. 157. 158 и др.
19）Enc. I. 391.
20）Aesth. I. 72.
21）"als in einem An-sich"（〈即自的なもの〉においてであるように）: Aesth. I. 104.
22）Cp.: Aesth. I. 104.
23）Aesth. I. 104. Курсв Гегеля.
24）Beweise. 424.
25）Aesth. I. 130.
26）Log. III. 272. Cp.: Enc III. 291
27）Aesth. I. 195.
28）Aesth. I. 127.
29）Aesth. I. 127.
30）Recht. 252.
31）Aesth. I. 140.
32）Enc. III. 46 175（Z>）. 289（Z.）.
33）"Grundlage": Enc. III. 42（Z.）.
34）Cp.: Enc. III. 46.
35）Cp.: Enc. III. 46.
36）"Materiatur"; Log. III. 271.
37）"im Menschen und durch den Menschen"（人間において、そして、人間を通じて）: Aesth. I. 40.

38) Aesth. I. 40.
39) "Gegenwart": Beweise. 426.
40) Cp.: Nohl. 313. Beweise. 294.
41) См. Главу тринадцатую.
42) Nohl. 313.
43) Beweise. 330. 428. 428. Enc. III. 292. См главу двенадцатую.
44) См. главу одиннадцатую.
45) См. гравы первую, десятую и одиннадцатую.

第15章　意思　Глава пятнадцатая ВОЛЯ

【人間の生（生活活動）の意味＝〈自由〉の実現、〈理性的かつ善良なる意思の開示〉→ 魂の〈自己深化〉

смысл человеческой жизни = осуществление *свободы*, *раскрытие разумной и благой воли* → *самоуглубление* душ】

人間の生（生活活動）の意味смысл человеческой жизниは、〈自由〉の実現осуществление *свободы* に、同じことであるが、〈理性的かつ善良なる意思の完全な開示（解明）〉*целостное раскрытие разумной и благой воли* に、存する。このこと（自由の実現と意思の開示）は、次のような形で行われる。すなわち、人間の魂душаは、漸次постепенно、実存（現存）の経験的かつ有限的な形式を克服し、эмпирическую и конечную форму существования преодолевать自己の普遍性（一般性）を把捉し、свою всеобщность постигать そして、唯一の大文字の実体（基体）の生（生活活動）に従う（自己を委ねる）единой жизни Субстанции себя преддать、という形で。しかしながら、思弁的な力と実体的（基体的）な生（生活活動）は、〈外から人間にやってくる〉わけではないне *приходят к человеку извне*。それらは、太古から人間の最深の本質を構成して、искони составляя его глубочайщую сущность〈人間の中に、そもそもの始めから、臨在している *присутствуют в нём с самого начала*〉。理性的な意思への、そして、さらにいえば、非実体的な自由への、道程は、人間の魂によって遂行される〈自己深化〉である。Путь к разумной воле и, далее, к не субстанциальной свободе есть путь *самоуглубления*, совершаемый человеческой душою.

【精神（理性的意思）の思弁的変容の道程（自己深化あるいは精神的成熟の過程）：抽象性 → 具体性、主観性 → 客観性

путь спекулятивной метаморфозы духа (разумной воли) (процесс самоуглувления или духовного созревания) : абстрактность →

конкретность, субъективность → объективность】

「思弁的な変容」のこの道程этот путь «спекулятивной метаморфозы» は、いつものように、自己の原理началоを、内容的な貧困性бедность から、無媒介的（直接的）な簡潔（単純）性 не посредственная простотаと抽象的な単一性абстрактная единичность から、導出し、内容的な豊饒性богатство へと、媒介化され複雑化されている簡潔性 опосредствованная и осложенная простотаと具体的な普遍性（一般性）конкретная всеобщность へと、上昇していく。〔そのとき〕魂のより低い状態のそれぞれは、跡形もなく消失исчезать することはなく、〔また〕後方に残されたままにされていることもなく、契機として в виде момента、発展のより高い段階において на высшей ступени развития、保持されている сохраняться[19]。主観的な精神の最高の（より高い）段階としての理性的な意思は、深化された状態состояние углубленное であり、具体的で、同時に、全体的に簡潔（単純）なもの конкретное и в то же время целостно-простое である。その理性的な意思において、集められ、集中化されている、それらのより低い諸状態が、形象化образовать するのは、経験的な諸限定の雑多な総和ではなく、精神の古典的に簡潔な〈暫定協定〉〔生存様態、確実な生存のための折合・妥協〕modus vivendi である。魂 душа は、意思のアスペクトにおいては、理性的かつ全体的 разумна и цельна であるが、自己の全ての無限の力によって、唯一の対象に、すなわち、神に、あるいは、〈絶対的な精神〉に、向けられている。こうした魂は、主観的な精神として（の形姿で）成熟 созревть していき、そこにおいて、その魂の「法（権利）」»право»、「道徳」»мораль»、「人倫（習俗規範）」»нравственность»、そして「国家」»государство» と名づけられた、諸状態が開示される、そうした水準 уровень を、段階的に築く（組成 слагать する）。

【客観的な精神 → 自由な自己限定：〈「自然的な有機体」の深淵において発火した魂の生活活動の原理〉

объективный дух → свободное самоопределение：*начало душевной*

***жицни, загоревшейся в глубие «естественного организма»*】**

かくして、「客観的な精神」の領域сфера *объективного духа* は、理性によって十分満たされ、自由な自己限定の状態にまで成育した、そうした〈人間の意思〉のエレメントにおいてв элементе *человеческой воли*、開示される。かくの如き意思は、先行する思弁的な過程の帰結であり、この過程の結果は、〈「自然的な有機体」の深淵において発火した（燃えはじめ、輝きはじめた）魂の生（生活活動）の原理〉*начало душевной жизни, загоревшейся в глубиние «естественного организма»* と一致する。ヘーゲルにとっては、〈主観的な意思〉の成熟の過程процесс созревание *субъективной воли* は、かくの如く表象されているのである。

【「自然的な魂」～「自己の諸知覚の全体性」としての自己体験～〈感覚する〉魂

естественнаядуша ～ испытать себя как «*тотальность своих ощущений*» ～ *чувствующая* душа】

〈主観的な精神〉のもっとも低い段階として現象するのは、自己の自然的な存在の単純な諸過程の中に無媒介的（直接的に）沈められている「自然的な魂」»естественная душа», непосредственно погружённая в процессы своего природного бытия である[2]。魂は、自然が魂に無理強いнавязывать している諸内容の中に、溶解растворить されて、生活活動を営んでおり、そして、自然の諸々の影響влияния と限定определения とを、蒙っている подвергаться。魂は、気候（風土）климат[3]、年齢возраст[4]、民族раса[5]、遺伝наследственность、気質темперамент[6]、情欲половое влечение[7]、睡眠の威力власть сна[8] によって限定されている определяться。魂は、無意識的で思惟しない生（生活活動）бессознательная и нерассуждающая жизнь[11] の、「単純な脈動」»простое пульсирование»[9] に、「縺れた編物」»смутное плетение»[10] に、身を委ねている предаться。魂は、自己の完全に私的で主観的な特異性своё, вполние личное и субъективное своеобразие[12] から離れないし、〈主観（主体）

的なもの〉を〈客観（客体）的なもの〉から区別することさえしない[13]。魂が為しうることは、せいぜいのところ、魂の中に〈外から〉押し入ってくるизвне ломитьсяものを、そして、内においてその（魂の）中で静まっているвнутренне разряжаться в ней ものを、〈知覚すること〉*ощущение*（Empfinden）だけである。この〈知覚すること〉は、魂が、ひとつの内容を、〈自己の身体に〉、他の諸内容を、逆に、内的なものに、「自己に」、結び付けるприурочить ことを、そして、自己を「自己の諸知覚の〈全体性〉」»тотальность своих ощущений» として体験испытатьすることを、強いるзаставлять[14]。この体験испытаниеの中に、すでに、自己の中への反省的復帰рефлексия в себяの、自己への回帰возврат к себеの、端緒（原理）началоが存在している。魂は、〈感覚する〉魂となる *чувствующей* душой станавиться[15]。

【感覚的諸知覚の〈主体〉（「内的個体性」、〈自己性〉）としての魂：思惟と意思によって抑制されない感覚：魂の〈自己感覚〉、〈習慣〉の力による諸情動（諸衝動）の制御

душа как субъект («внутренняя индивидуальность», *самость* [selfhood]) чувственных ощущения: чувство, не сдерживаемое мыслью и воле; *самочувствие* душы; силою привычки своими аффектами овладевать】

感覚（すること）чувствование（Fühlen）において、魂душаは、自己を、自己の諸知覚の〈主体〉*субъекта* своих ощущенийとして、発見наитйした[16]。その（魂の）諸知覚は、その（魂の）諸知覚であるが、しかし、それ（魂）は、それら（の諸知覚の）「内的な個体性」их «внутренняя индивидуальность» である[17]。魂は、「独自の（独特な）」[18]、自己の「内的な諸限定」の、閉ざされた世界 «особый», замкнутый мир своих «внутренних определений»[19]、すなわち、単子（モナド）монадаである[20]。感覚的な諸知覚〔作用〕чувственные ощущенияは、すでに、魂を虜（とりこ）にв плену держатьしていない[21]。反対に、魂はそれら（の感覚的な諸知覚作用）を〔相互に〕区別различатьし[22]、そして、自己を、それら（の感覚的な諸知覚作用）から切り離обособлять

している[23]。最初、魂は、まだ受動的で、感覚の過程の中で開け放（溶か）растворитьされていて、そして、〈魂の自己性（利己性）〉*её самость*〔selfhood (selfishness)〕という、魂の中に隠された「創出（産出）主体（守護神）」скрытый в ней «гений»（genius）と、自己を同一化отождествлятьしていない[24]。思惟と意思とによって抑制されていない感覚чувство, не сдерживаемое мыслью и волей[25]は、魂を夢遊病者сомнамбла（somnambulist）に変えて[27]、魂を自己の暗鬱な〔五感の塞がれた、聾唖の[26]〕諸道程によって導くеё своими глухими птями вести（leads it along its obscure paths）。その後、魂は覚醒просыпатьсяし、自己を自己の諸感覚からот своих чувствований分離отделятьし、順次по очереди、一つの情動（衝動、興奮）аффектから他の情動に移動переходитьしながら、自己の主体（主観）的な統一性（一体性）субъективное единствоを確立утверждатьする。魂は〈自己感覚〉*самочувствие*（*self-feeling*）になる[28]。しかしながら、魂は、自己の諸内容の支配力власти над своими содержаниямиを、いまだ有していない。諸々の情動は、〈心理的・生理的な〉現存態*психофизиологическое* существованиеを導きвести、服従（隷属）починениеから抜け出し、自己の屈伸性（流動性）текучестьを喪失утрачиватьし、魂を、魂のありとあらゆる病болезниへと、連れ去るувлекать[29]。もっぱら漸次的にлишь постепенно、〈習慣〉の力によってсилою *привычки*、魂は、自己の諸情動を支配（制御）своими аффектами овладеватьし、それら（諸情動）の流れ（推移）を機械化их течение механизироватьし、無意識的な合目的性（目的適合性）бессознательная целесообразностьを伴って、それら（諸情動）の中で運動двигатьсяしている[30]。

【魂（自、内）―身体（他、外）の分離性と同一性：身体に発する諸知覚と身体そのものとを（自他、内外の同一性を）支配する、活動現実的な魂：魂における身体からの自己の分離と自己への帰還 ＝〈意識〉の成立

отделение и тождество между душой (собою, внутренним) и телом (другим, внешним)：действительная душа, овладевающая ощущениями,

идущми от тела, и самим телом ; себя от тела отделять, и к себе обращаться в душе = возникновение *сознанения*】

身体〈から〉発している自己の諸知覚своими ощущениями, идущими *от* телаを、そして、身体的な部類に入る諸感覚を、制御（支配）овладеватьしながら、魂は、まさにそのことによって、身体〈そのもの〉*самим* теломを制御（支配）し、そして、〈活動現実的な〉魂となる*действительною* душоюстановиться[31]。魂は、自己と自己の「外的なもの」との間の同一性тождества между собою и своим «внешним»を達成достигатьし、そして、この同一性を自己に従属させるего себе подчинять[32]。身体телоは魂によって徹底して働かされпроработано душою、そして、魂によって自己のものに（横領、領有）されるприсвоено ею。身体は、〈魂を形象化*изображать*し〉、そして、魂の標識знак、魂の最初の現象явление、魂の被造物создание、となる[33]。このことが意味しているのは、〈魂は、身体の中に留まりながら*в теле оставаться*、自己を身体から解放している*себя от тело освобождать*〉、ということであり、そして、自己を解放してから、身体を自己に「対立させ」его себе «противопоставлять»、自己を身体から分離しсебя от него отделять、身体を「否定して」его «негировать»、そして、自己に帰還するк себе обращаться、ということである。魂は〈意識〉となる[34]。Душа становится *сознанием*.

【魂の生活活動＝意識＝主・客の相互媒介・相互限定：自己への反省的復帰—精神の無限性・理念的同一性：意識と知識の主体としての〈自我〉—魂の本質を構成する確信

жизнь душы = сознание = взаимопосредничество-взаимоопределение субъекта и объекта : рефлекся к себе — бесконечность духа-идеальное тождесво ; *Я* как субъект сознания и знания— достоверность, которая конституирует её существо】

〈意識〉*сознание*は、自己の直接無媒介性непосредственностьを喪失

утратить した魂である。[35] 魂が生きて（生活活動を営んで）いるのは、「客体の中で」»в объекте» ではなく、「客体によって」»объектом» でもなく、「客体について（関して）」»об объекте» である。このことが意味しているのは、次のことである。すなわち、魂は、「自己一般」»себя вообще» を、何らかの「内的なもの」»внутреннее»、「理念的なもの」»идеадьное»、「自我」«Я»、として、それが何であれ、「客体一般」に、»объекту вообще», каков бы он ни был 対置 противопоставлять している、ということである。[36] 魂は、〈自己〉*себя* を、抽象的な普遍性（一般性）абстрактную всеобщность として確信 утверждать しているが、「客体」*объект* を、「〈自己の〉諸限定の〈自然的〉な全体性」»*естественную* тотальность *своих* определений»[37] として、確信している。魂は〈客体〉と〈関係する〉она *относится* к *нему* が、同時に、〈自己〉の中への反省的復帰を果たし совершать рефлексию в *себя*、はじめて、精神の「無限性」»бесконечность» духа を示す являть。[38] こうした反省的復帰において、魂は、自己の最終的な集中点としての、確実な[39]理念的同一性[40]としての、自己に、立ち戻る。В этой рефлексии она возвращается к себе как своему окончательному средоточию, достоверному, идеальному тождеству.「自我」»Я» は、意識と知識との主体 субъект сознания и знания であり、「思惟」の端緒（原理）начало «*мысли*»[41] であり、それゆえに、光（世界）[42] と信念との端緒（原理）である。自己の「自我」своё «Я» を認識してから、魂は、自己の同一的な中心に своего тождественного центра、魂の本質を構成する〈確信〉той *достоверности* (Gewissheit), которая констуирует её существо に、達する достигать。[43] この支え опора は、魂に、客体との闘争に着手する可能性 возможность приступить к борьбе с обектом を与える。

【〈意識〉↔対象（主体↔客体）の同一性：〈認識する〉意識←感覚・知覚・形象化（想像力）：分割、限定―普遍的〈諸概念〉・抽象的〈範疇〉―〈悟性〉：意識によって認識される客体の本質としての諸〈法則〉：①客体の本質は主

体によって産出される、②主体は客体の中に自己自身を発見する、③〈他のもの〉の意識は本質において〈自己意識〉である。

***сознание* ↔ предмет (субъект ↔ объект) : *знающее* сознание ← чувство, восприятие, воображение : расчленение, определение ← вообщие *понятия*, абстрактные *категории* → *рассудок* : ①сущность объекта порождена субъектом. ②В предмете субект находит самого себя. ③Сознание *«иного»* есть в сущностти самосознанние.】**

客体に向かってобращаясь к объекту、意識сознаниеは、何よりもまず、客体との無媒介的・感覚的な関係からот непосредственно–чувственного отноношения、自己を解放освобождаться[44]し、そして、それ（その関係）を、その（その関係の）真の諸特性（属性）の中に受け入れる（を知覚する）его в его истинных свойствах воспринять（wahrnehmen）ことを希求стремиться する[45]。知覚と想像（形象化）の力によってсилою восприятия и воображения、意識は、それ（客体）との同一性тождествоの中に入り込み、そして、この道程において獲得されたものを、分割расчленять し、限定определять しはじめる[46]。：意識は、〈認識する〉意識となる。：оно становиться *знающим* сознанием. 限定し、そして、認識しながら、意識は、内容に充たされた単一の物質（材料）を普遍的な諸概念と抽象的な諸範疇の下に連れて行く（従属させる）。Определяя и познавая, оно подводит единичный, содержательный материал под всеобщие понятия и абстрактные категори. 意識は、〈悟性〉*рассудок* となり、かくして、「自然本性の諸法則」»*законы природы*»を構築построять する[47]。これらの普遍的な諸法則は、諸現象の本質そのものсамо существо явлений を把捉схватывать し、保持удерживать する。〈法則は客体の本質である〉。：*закон есть сущность объекта*. しかし、法則は、客体によって創造されるのではないне объектом создан。法則は、主体的な意識の力によって認識され、開示され、描出されるсилою субъективного сознаня осознан, раскрыт и начертан。法則は「普遍的なもの」

の産物продукт «всеобщего» である[48]。かくして、魂は、次のことを確信する。すなわち、客体の本質は主体によって生み出される、ということを、что сущность объекта прождена субъектом、；対象において、主体は〈自己自身〉を発見する、ということをчто в в предмете субъект находит *самого себя*、そして、「他のもの」の意識は、本質において、〈自己意識〉である、ということをчто сознание »иного» есть в сущности *самосознание*[49]。

【悟性的（＝抽象的、主観的、単一的）自己意識 ＝渇望→ 対象の自己性（利己性）〔必要＝欲求〕の否認＝対象の殲滅的・利己的な〈消費〉→ 新たな渇望を伴っての自己への帰還→自己性（利己性）を欠く客体における悟性的自己意識〔即自性・無媒介性〕の喪失の経験＝対象における自由な自己性の発見 ～〈認識する自己意識〉〔→自己への反省的帰還〕〔自己意識によって確認される被媒介性・相互被限定性〕：〔即自存在・対自存在の生成〕

рассудочное (абстрактное, субъектное, единичное) самосознание = жажда, алкание → отрицание самости предмета = своекорыстное и уничтожающее потребление → возврашение с новым алканием к себе → опыт утратой своего самосознания в бессамостном объекте ~ нахождение начала свободной самости в предмете (рефлексия самосознания с алкания к себе) : (утверждённая самосознанием опосредствованность-взаимоопределённость) : становление быти по себе и для себя】

しかしながら、悟性的な自己意識は、客体から切り離されたままに留まっている。Однако рассудочное самосознание остается в отрыве от объекта. こうした自己意識は、抽象的абстрактно、主観的субъективно、そして、単一的единичноである。それ（悟性的な自己意識）は、自己の回りに、諸対象を見ており、そして、それら（の対象）に、はじめは、渇望〔渇きжажда と飢えалкание〕を伴って、近づくподходить[50]。それ（悟性的な自己意識）は、それら（諸対象）を利己的（身勝手）に、かつ殲滅（壊滅）的に[51]、消費

しих своекорыстно и уничтожающе потреблять、この消費において、開け放される（溶解する）в этом потреблении растворяться。それ（悟性的な自己意識）は、それら（諸対象）の自己性（利己性）их самости を認めず не признать、自己性を欠く[52]客体において、自己の〈自己意識〉を〈失い〉*утрачивая* в бессамостном（selbstlos）объекте своё *самосознание*、新たな渇望を伴って自己に帰還 к себе с новым алканием возвращаться する。こうした経験опыт は、魂に、客体への他の（別の）関係を教える иному отношению к объекту научать。自己意識самосознание は、〈対象の中に、自由な自己性（利己性）の端緒（原理）を見ること〉*видеть в предмете начало свободной самости приучаться* を習い覚え、そして、〈認識する自己意識〉となる» *признающим самосознанием*» становиться[53]。

【二自己意識間の生死を賭けた闘争～支配＝主奴関係 → 主人と奴隷の弁証法 → 無欲（禁欲）に耐える（自己放棄を克服する）奴隷 → 諸事物や諸関係の理性的観照（直観）→内的自由

борьба на жизни и на смерть между двумя самосознанями → господство = отоношение между господином и слугом → слуга, преодолеющии бескорыстие (самоотречение) → разумное созерцание вещей и отношений → внутренная свобода】

かくして、互いに自己の自由を示そうとし、そして、自己の現存существование によってのみ互いを制限（束縛）ограничивать する、〈二つの個体的な自己意識〉は、邂逅встретиться する。ここから、それらの間で、生死を賭けた闘争борьба на жизнь и насмерть が生起возникать する。この闘争は、一方の勝利победа とその一方の他方に対する支配（制覇）господство（Herrschaft）とを以て、終結заканчиваться する[54]。闘争борьба と隷属における生活жизнь в подчинии とは、征服された奴隷покорённый слуга（Knecht）に次のことを強いる заствлять。すなわち、自己において〈無欲（禁欲）に耐える（を克服する）〉こと *преодолеть в себе бекорыстие* を、そして、そ

のことによって、自己に〈諸事物や諸関係の無欲（無私）で対象的かつ理性的な観照（直観）〉への通路を拓くことтем открыть себе доступ к *бескорыстному предметному и разумному созерцанию вещеи и отношение* を。余儀ない（強制された）〈自己放棄〉вынужденное *самоотречение* は、奴隷にとって、〈内的な自由〉の始まりначало *внутренней свободы* である。奴隷は、外的な強制の諸限界を超えて、〈自己〉の本質を見ることвидеть свою сущность запределами внешнего принуждения を、そして、支配において、同様の自由の深淵を認識することпризнавать в господине такую же свободную глубину を、学習научаться する。無媒介的かつ単一的な魂の「対象的な発展（成長、高揚）」[55] »предметный подъём» が完遂されるсовершаться。そして、こうした発展（成長、高揚）は、不可避的に、自己の力と誠実верность とによって、主人をもまた感化заражать する（感染させる）[56]。

【自己意識：主体と客体の同一性 → 理性＝精神 → 理性的な自己限定

самосознание : тождество субъекта и объекта → разум = дух → разумное самоопределение】

かくして、自己意識は、単に「客体を意識する」ことだけでなく、それ（客体）を、独自の自己意識особое самосознание として、経験的な仮象からして「他なるもの」»иное» по эмпирической видимости として、しかし、〈まさしく理性的かつ精神的なもの〉 *столь же раумное и духовное* として、意識сознавать することに、慣れるприучаться。客体は、主体にとって、〈一般的（共同的）かつ特殊的（単一的）なエレメントの器官（機関）〉 *орган общей и единой стхии* となる。このことは、次のことを意味している。すなわち、主体は、〈客体〉において、〈主体そのもの〉の本質を構成する、大文字の〈理性〉 *Разум* の、現象を見ることを、学習する、ということを[57]。主体は、対象において、「自己」を、しかし、「自己」において、理性的な本質を、見る[58]。主体は、理性разум の領域の中に、すなわち、主体と客体の同一性тождество субъекта и объекта の領域сфера の中に[59]、そして、精神дух の、す

なわち、純粋な理性的な自己限定разумное самоопределениеの、領域の中に[60]、踏み入るのである。

【魂と意識の「真実態」としての精神：実体の知識の実現：自己限定：理性的な大文字の〈概念〉としての世界

дух как «истина» души и сознания： осуществление знания субстанция：самоопределение： мир как раумное Понятие】

精神は魂と意識の「真実態」である[61]。Дух есть «чистина» души и сознания すなわち、精神は魂と意識を包容обнять（обнимет←объемлет）する。但し、〈最高の〉水準において на вышем уровне のみ、そうする。主体の状態が〈精神的〉であるのは、主体が自己の対象において〈制限する他在〉*ограничивающего инобытия* を見ること〈なく〉*невидеть*[62]、「単に主観（主体）的」でもなく、「単に客観（客体）的」でもない、実体（基体）субстанцияの、知識знаниеを、実現（現存化）осуществлятьするときである[63]。精神が係わるのは、〈自己固有の諸限定*свои собственные определения* のみ〉である[64]。精神が出発するのは、〈世界〉は〈理性的な大文字の「概念」〉*разумное Понятие* であり、〈大文字の「概念」〉*Понятие* は〈対象的な実在性（現実性）〉*предметная реальность* を有している、ということについての揺るぎない確信непоколебимая уверенность からである[65]。

【〈知性〉としての精神 дух как *интеллигенция*】

しかしながら、こうした構想（基本理念）концепцияは、精神にとって、もっぱら〈課題〉[66] *задание* に留まっているにすぎないが、こうした構想（基本理念）を真実態として信奉する精神そのものсам дух, исповедующий её как истинную は、主観的かつ有限的なものに留まる[67]。精神は、認識をк познанию、こうした世界観の〈理論的な〉正当化к *теоретическому* оправданию такого мировоззрения を、希求стремиться し、そして、〈知性〉*интеллигенция* であることが判明する。

【自己限定、自己開示：知性＝意思

самоопределение, самораскрываниеэ : интеллигенция=воля】

〈知性〉の課題は、次の点に存する。すなわち、真実で適切な認識様式 верный и адекватный modus cognoscendi を、すなわち、精神生活に活動現実的で真実の〈自己限定〉を、付与するであろう、そういう〈知識様式〉*способ знания*, который придал бы жизни духа характер действительного и истинного *самоопределения* を、発見する、という点に。人間の魂は、次のような深淵に、自ら苦難の末に達しなければならない。Душа человека должна выстрадать себе ту глубину. すなわち、そうした深淵において、人間の魂は、次のことを、真に体験する（気付く）подлинно увидеть。すなわち、精神的な生活活動の〈あらゆる〉運動は〈自己限定〉である、что всякое движение духовной жизни есть *самоопределение* ということを、そして、〈精神は自己を自己から開示する創造的な活力である〉、чот дух есть творческая энергия, раскрывающая себя из себя ということを。そのとき、知性は〈意思〉となる[68]。Тогда интеллигенция станет *волею*.

【知性として、自己限定する生活活動を錬成し、直観的な思惟活動を探求する、精神

дух, который в качестве интеллигенции выковывает самоопределяющуюся жизнь и ищет интуитивное мышление】

かくして、精神は、知性интеллигенцияとして、自己の内的で「理念的」な世界の上でнад своим внутренним «идеальным» миром、労苦し自らに〈自己限定する〉生活活動を鍛え上げるсебе *самоопределяющуюся* жизнь выковывать[69]。精神は、不可避的に、「与えられた」、あるいは受動的に「発見された」、客体に、甘んじている、諸々の認識様態те способы познания, которые мирятся с «данным» или пассивно «найденным» объектомを、克服преодолетьしなければならない[70]。精神は、〈対象の創造〉と同意義であろうところの〈知識活動〉*знание*, которое было бы равносильно *созданию предмета* を、探求искатьする。— 精神は〈直観的な思惟活動〉*интуитивное мышление*

を探求するのである。

【理性的自己意識—思惟活動の成熟、感覚的対象の自己同化（形象化）—知覚する経験、注意、直観、対象の実体の把捉、表象、想起、形象化、諸形象の結合、普遍的意味、精神の思弁的象徴、記憶、対象と名称との結合

разумное самосознание : созревание мышления, усвоение (образование) чувственного предмета —ощущающии опыт, внимание, созерцание, ухватывать субстанцию предмета, представление, воспоминание, образование, связь образов, всеобщее значение, спекулятивный символ духа, связь между предметом и названием】

理性的な自己意識разумное самосознаниеは、最後に、魂の生（生活活動）душевная жизнь の最下級の諸段階に向う（着手する）。但し、すでに確固たる信念を伴ってуже с твердою верою、自己の精神性духовность の中へと。理性的な自己意識は、それら（そうした最下級の諸段階）を〈撤回（除去）〉*снимать* し、それらから、思弁的な思惟спекулятивную мысль を育成выращивать する。〈知覚する経験〉*ощущающий опыт* は、精神のために、知識の全ての直接無媒介的な材料весь непосредстенный материал знания を、動員мобилизовать する[71]。〈注意（顧慮）〉*внимание* は、対象を記録фиксировать し[72]、精神の内的な活力внутреннюю энергию духа を集めсобирать、そして統一объединять し[73]、侵入する主体の恣意вторгающийся произвол субъекта を抑えподавлять[74]、恣意をして対象に服せしめるего предаться предмету заставлять[75]。〈直観〉*созерцание* は、対象предмет を注意深く経験しвнимательно испытывать、主体の理性的な深淵разумная глубина から客体の理性的な深淵へと浸透проникать し[76]、そして、対象の成熟した実体（基体）зрелую субстанцию предмета を把捉ухватывать する[77]。さらには、〈表象〉*представление* は、直観が獲得したものдобычу созерцания を精神の内的な世界へとво внутренний мир духа 齎し уводить、そして、それ（その直観が獲得したもの）を、三段階において、支配下におくею на трёх этапах

овладевать[78]。〈自己同化（会得）〉*усвоение*（Erinnerung, 特殊な〈想起（回想）〉*воспоминание*）は、対象の見てとられた（直観された）形象узренный образ（Bild）を、無意識的なるものの「夜の地下鉱山」в «ночную шахту» бессознательнного へ沈め（浸し）погружать、それ（その形象）を保持сохранять し、それを自己の諸表象представления の下におき、それを自己の所有物собственность として確認опознать する[79]。〈形象化〉の力сила *воображения* は、自己のものにされた内容присвоенное содержание を、主体（主観）的な深淵からиз субъективной глубины 引き出しизвлекать[80]、それ（その内容）を、新たに創出された形象として（の形姿で）его в виде заново созданного образа、再現（再生産）воспроизводить し[81]、その形象と他の諸形象の間の連想的な結合ассоциативные связи между ним и другими образами を確立устанавливать し[82]、そして、自己の創造物を〈普遍的（一般的）な意味〉によって充分に満たしнасыщая своё создание *всеобщим значением*、その創造物を、表現された内容の本物の臨在を自己において保持している、精神の思弁的な象徴спекулятивный символ духа, хранящий в сбе подлинное присутствие выражаемого содержания へと、変えるпревращать[83]。〈精神的な内容の、すなわち、対象の〉、象徴としての形象は[84]、固有の名称особое наименование を受け取り[85]、そして、対象と名前との間の仲介者посредник となる。最後に、〈記憶〉*память* は、〈対象と名称〉との間の結合связь между *предметом и названием* を強化закреплять し、感覚的な〈形象〉の〈仲介（媒介）〉を〈投げ出し〉выбрасывать、そして、〈対象の内容を一つの名で〉*содержание предмета по одномуимени* 再現（再生産）воспроизводить する[86]。記憶が材料（物質）を〈全く〉支配（制御）материалом вполние овладевать するとき、記憶は、安定的な、それゆえに、普遍的（一般的）[87]で対象的な、諸内容に対する、機械的な優越（支配）механическое господство над устойчивыми, и потому всеобщими, предметными содержаниями を、達成полчать する。〈主体の内的な力は、感覚的・非形象的な対象を、とことん、

自己同化（会得）するが、非形象的な対象は、主体（主観）的な精神の運動によって、浸透される〉。：*внутренняя сила субъекта усваивает до конца чувственно-безобразный предмет, а безобразный предмет проникается движением субъективного духа.* 魂は〈思惟活動〉にまで成熟したのである。[88] Душа созрела до *мышления*.

【知性：思惟すること＝諸思惟範疇を自己の内容と対象として有すること：精神のエレメント（主体＝客体）—普遍的—自己創出

интеллигенция : мыслить=иметь мысли в качестве своего содержания и предмета : стихия духа (субъект=объект) —всеобща—самосоздание】

知性は〈思惟する〉。Интеллигенция *мыслит*. このことは、次のことを意味している。すなわち、知性の基本的な力は、〈自己固有の産物、安定的で非形象的で普遍的な対象〉に、〈すなわち、思惟（思惟範疇）*мысль* に〉、係る、ということを。「思惟する」»мыслить» ということは、「諸々の思惟（思惟範疇）を有する」»иметь мысли» ということ、すなわち、それらを自己の内容と対象として有する иметь иих в качестве своего содержания и предмета、ということ、これを意味する。[89] 精神のエレメント стихия духа は〈普遍的（一般的）〉*всеобща* である。なぜならば、それは一つ едина であり、安定的 устойчива であり、実体的（基体的）субстанциальна であり、そして、全てに浸透している всепроникающа からである。その（このエレメント）の対象 предмет は、同様に、〈普遍的（一般的）〉*всеобщ* である。なぜならば、それ（その対象）は、安定的 устойчив、本質的 существен、そして、形象的な多様性から引き離されている（抽象・捨象されている、を度外視している）отвлечен от образного многообразия からである。主体は対象 предмет を自らに創出 создать したのであり、完全に内在的 вполне имманентный であり、そして、〈その（対象の）〉認識において в познании *его*、主体は〈自己〉を〈諸事物の真の本質〉として認識する он узнает *себя как истинную сущность вещей*。[90]

【思惟活動：悟性～理性：諸判断、諸推論の諸融合：生きている（生活活動を営む）客観的な大文字の「概念」＝ 理性的自己限定のエレメント（境位）мышление (Denken): рассудок (Verstand) ～ разум (Vernunft): «перворазделы» суждений (Urteilen), «слияния» умозаключений (Schlusse): живое, объективное Понятие (Begriff) = стихия разумного самоопределения (Selbstbestimmung)】

思惟活動に残されているのは、〈形式的・悟性的な〉状態から〈思弁的・理性的な〉状態へ от *формально-рассудочного* состояния к *спекулятивно-разумному* 上昇 подняться することであるが[91]、〈主体（主観）的な精神〉の〈理論的な〉自己解放 теоретическое освобождение субъективного духа は、終結されるであろう будет закончено。抽象的な諸概念の中に同一的に滞留していることから от тождественного пребывание в абвстрактных понятиях、思惟 мысль は、諸判断という「原初的（本源的）な諸分割〔主語と述語とに分割してそれらを再結合すること〕」»перворазделам» суждений〔Urteilen〕へと赴き、そして、諸推論の具体的な諸「合流（融合）」への自己の上昇（登高）своё восхождение в конкретных «слияниях» умозаключений を完遂 завершать する[92]。主観（主体）的な思惟活動 субъективное мышление は、生きた客観的な大文字の「概念」の支配に屈服し отдать себя во власть живого, объективного Понятия[93]、〈理性的な自己限定のエレメント〉*стихией разумного самоопределения* となる。

【意思＝理性的自己限定の境位 воля = стихия разумного самоопределения】

〈意思こそ、理性的な自己限定のエレメントである〉。

【精神の境位としての意思：感覚的、主観的、特殊的、非本質的、直接的、一面的、偶然的、その内容が外発的な（内から成熟する）意思＝感覚する自己限定＝感覚・感情（歓喜、満足、羞恥、恐怖）に基づく意思活動 ↔ 理性的、客観的、普遍的、本質的、媒介的、全体的、必然的、内発的な意思＝思惟する反省と選択する意向によって自己を制御しようとする意思（関心―

目的 → 自由な自己限定— 大文字の「意思」)

воля как стихия духа: чувственный, субъективный, особенный, несущественный, непосредственный, одосторонний, случайный воля (содержания которого приходят извне) = чувствующее самоопределние = воление, оснаванное на *чувствие* (радость, удовольствие, стыд, стах) ↔ разумный, объективный, всеобщий, существенный, посреднический, тотальный, необходимый воля. содержания которого вырастут изнутри = воля, который пытается руководить собою посредством *мыслящей рефлексии и выбирающего изволения* (интерес — цель → свободное самоопределение — Воля】

しかし、なによりもまず、意思は〈主体（主観）的な精神のエレメント〉стихия *субъективного духа* であり、そして、そのかぎりで、意思は、そもそものはじめには、個人的で、無媒介的な、〈感覚する自己限定〉личное, непосредственное, *чувствующее* самоопределение の形で（として）、生まれる зарождаться。こうした自己限定は、理性的でありえるとしても、偶然的かつ主観的な性格を帯びかねない[94]。〈感覚〉に基づく意思活動 воление, оснавaнное на *чувстве* は、「一面的、非本質的、悪しきもの」»односторонний, несущественный, дурный[95]» でありかねない。それは、精神の理性的・本質的[96]な道程 разумный существенныйпуть духа とは一致しえない。歓喜 радость と満足 удовольствие、羞恥 стьд と恐怖 страх[97]、これらは偶然的な内容を有しているが、こうした偶然的な内容は、理性の自然本性がそれを要求するようには[98]、〈内在的にそれらから成長するのではなく〉 *не вырастающее из них имманентно*、外から来着する но приходящее извне。ところが実際は а между тем、理性的な自己限定 разумное самоопределение は、〈意思そのものから出発 исходить от самой воли〉しなければならない。これ（理性的な自己限定）に近づこうとしながら、意思は、何らかの一つの内容に集中 сосредоточиваться し、そして、自己を、自己に満足を創出することに邁進

する〈熱情的な渇望（憧憬）〉*страстное влечение*, стремящееся создать себе удовлетворение として、確信（断言）утверждать する。[99] 意思は自己に〈目的〉*цель* を設定し、そして、この目的と自己の〈関心〉интерес を結びつける。[100] しかし、意思は、〈完全な〉満足を求める искать *полного* удовлетворения が、それ（そうした満足）を発見することなく、〈思惟する反省と選択する意向〉と を 以 て посредством *мыслящей рефлексии и выбирающего изволения*、自己を導こうとする пытаться руководить собою。[101] さまざまな渇望 влеченя、関心 интересы、傾向（素質、愛着）склонности の間の闘争において、意思は、最後に、次のことを理解（把捉）постигать する。すなわち、満足の完全性 полнота удовлетворения である〈至福〉*блаженство*[102] は、〈目的〉が〈意思の基本的かつ普遍的で理性的な本質に完全に〉一致する〈であろう〉*цель будет вполне* соответствовать *основной и всеобщей разумной сущности воли* ときにのみ、達成される достигнуто であろう、ということを。完全な満足とは、〈全体性かつ普遍性〉の形姿で捉えられた、〈目的における精神〉の、満足 удовлетворение *духа в целом*, взятого в виде *тотальности и всеобщности* である。至福を達成するためには、意思は、まさしく、それ（その意思）がそれ（魂）の〈究極的、絶対的な〉諸根源を領有（支配）しているがゆえに、魂〈全て〉を包含している（虜にしている）、〈精神の究極的な深淵〉の中に в ту *последнюю глубину духа*, которая охватывает *всю* душу именно потому, что владеет её последними, абсолютными корнями、下降 опуститься していかなければならない。この水準まで下降しおえた、そして、〈全てに浸透する〉精神の本質と自己同一化しおえた、そうした意思 воля, опустившаяся на этот уровень и отождествившая себя со *всепроникающей* сущностью духа だけが、満足の十全性を獲得しうる。なぜならば、意思だけが満足のためにそれ（意思）に不可欠な自己の対象を〈内在的に〉創出 *имманетно* создавать しうるし、意思だけが魂の普遍的な実体 всеобщая субстанция души であり、意思だけが自由であり、意思だけに、絶対的かつ

自由な自己限定 абсолютное и свободное самоопределение は達成されるからである。こうした意思だけが、〈真正の大文字の「意思」〉 *истинная Боля* なのである。

【主体的精神によって辿られた全ての諸道程の具体的成果である意思：思弁的「概念」の本性を形象化的思惟によって我物にすること＝意思の具体的本性を我物にすること → ヘーゲル哲学における、法権利、習俗規範態といった「諸概念」の概念把握（Begreifen der Begriffe）

воля = конкретный итог всего пути, пройденного субъективным духом : усвойть природу спекулятивного Понятия воображающей мыслью = усвойть конкретную природу Воли → понятьПонятия как право, нравственность в философии Гегеля】

かくして、〈大文字の「意思」は〉主体（主観）的な精神によって辿られた〈全ての諸道程の成果（総括）[103] である〉 *Воля есть конкретный итог всего пути, пройденного субъективным духом*。ヘーゲルによれば、こうしたことは、スケッチ（概説）схемаでもフレーズ（決まり文句）фразаでもなく、もっとも本質的な意味に満ちたテーゼ（命題）тезис, полный самого существенного значения である。〈形象化する思惟によって〉 *воображающей мыслью* 思弁的な「概念」の自然本性を我物（自家薬籠中のもの）とした природу спекулятивного Понятия усвойть 後でなければ、ヘーゲルの教説に入り込む（を洞察する）こと проникнуть は、そもそも不可能である。これと同じく、〈「意思」の具体的な自然本性〉を *конкретную природу Воли* усвойть 我物（自家薬籠中のもの）とした後でなければ、法（権利）право や習俗規範態（人倫）нравственность についてのヘーゲル哲学における何かを概念把握（理解）понять することは不可能である。かれの基本的な諸教示の全てを、充分かつ真剣な注意力を以て、受け取ることは、不可避である。そのとき、以下のことが開示される。

【〈理性〉に服する〈意思〉→〈意思〉＝自由な自己限定の諸水準を達成した

人間的魂：〈理性〉＝創造的に自己を限定する精神の活力

***«воля»* подчинённый *«разумом»* → *«воля»* = человеческая душа, достигшая уровня свободного самоопределения: *»разум»* = творчески-самоопределяющаяся энергия духа】**

意思は、〈自由な自己限定の諸水準を達成した全体としての人間的な魂〉*человеческая душа в целом, достигшая уровня свободного самоопределеия* である。〈人間の本質〉*человеческое существо* は、明らかに、全ての〈その本質的な〉諸特質（相貌）〈と諸特性〉において во всех *его существенных чертах и свойствах*、〈調和的な単一性（統一性）に帰されており、そして、魂の最深の原基的（エレメンタール）な力に服している〉*сведённым к гармоническому единству и подчинённым самой глубокой стихийной силе дущи*。この力は、〈絶対的に善き、かつ創造的に自己限定する、精神の活力〉としての〈理性〉*разум как абсолютно благая и творчески-самоопределяющаяся энергия духа* である。

【直観する理性によって満たされた術語 термин насыщен созерцающим разумением】

これらの諸限定（諸定義）определения においては、各々の用語 термин は、生きている（生活活動を営んでいる）直観する理性 живой, созерцающее разумение よって充分満たされていなければならない。

【意思＝〈人間の全ての本質的な〉諸特質と諸活動性の〈有機的全一性〉（「活動現実的」魂、〈自己の身体的有機体において自由な、精神的な「自己性の権化」〉）＝ 形而上学的〈自己思惟活動〉という意味における「〈内的･理念的な自我〉」← 精神的深淵：「〈無限の反省的復帰〉」、「概念」の創造的自己還帰、「〈魂の同一的中心点〉」、「無私に・対象的に生活活動を営んでいる」力、「他在から自由な」精神、〈理性〉＝それにとって〈認識すること〉は〈創造すること〉を意味するところの「直観的思惟活動」、自己を能動的かつ自由に思惟する〈「概念」そのものの活力〉、〈全ての対象を自己から創出する〉「〈知性〉」、〈精神の最深かつ自由な境位としての〉理性の自己限定、〈精

神の統一的・全一的な激情〉

воля = *органическая цельность всех существенных* свойств и деятельностей человека («действительная» душа, *духовный «гений самости», свободный в своём телесном организме*) = «*внутреннее идеальное Я*» в смысле метафизического *самомысления* ← духовная глувина : «*бесконечная рефлексия*», творческий возврат Понятия к себе, «*тождественный центр души*», «бескорыстно, предметно живущая» сила, дух «свободный от инобытия», *Разум* = «интуитивное мышление», для которого *познать* значит *создать*, «ителлигенция» *создающая всякий предмет из себя, энергия самого Понятия*, мыслящего себя активно и свободно, самоопределение разума как *глубочайшей и свободной стихии духа, единая и цельная страсть духа*】

意思は、人間の〈全ての本質的な〉諸特性свойсваと諸活動性деятельностиとの〈有機的な全一性（全体性）〉*органическая цельность всех существенных* свойств и деятельностей человекаである。しかし、人間的な本質のこれらすべての諸特性は、その（人間的な本質の）〈精神的な深淵〉の支配господство его *духовной глубины* に〈服して〉*подчинены* おり、〈それ（その深淵）によって変容（形象転換）されて〉*преображены ею* おり、〔そしてまた〕〈その（その深淵の）従順な標識（記号）〉*её покорный знак* に変えられているпревращены。「自然的な魂」»естественная душа» は、（その諸限定を伴って）、そして、身体тело は、意思の外的な現象の境界的な限界 крайний предел внешнего явления волиを形象化образовать する。意思は、物質的・生理学的な外見（外貌）матерьально-физиологисческое обличие（обличье）を受け入れприемлет（принимает）、そして、空間的、時間的、そして、有機的な、諸条件からиз пространственных, временных и органических состояний、自己の信頼しうる道具своё верное орудиеを、自己の標識свой знакを、すなわち、〈身体的な有機体〉телесный организмを、鍛え上げるвыковывать。

意思は、「活動現実的」な魂 »действительная» душа、すなわち、〈自己の身体的な有機体において自由な、精神的な「自己性の権化（守護神）」〉*духовный »гений самости»* (genius of selfhood), *свободный в своём телесном организме* である。さらにいえば、意思воляは「意識」»сознание» であるが、しかし、もはや自己の客体から切り離されていないそれ（意識）уже не оторванное от своего объектаである。意思は「内的・理念的な〈自我〉」*»внуреннее идеальное Я»* であるが、しかし、経験的な意識の意味においてではなくне в смысле эмпирического сознание、形而上学的な〈自己思惟活動〉の意味においてв смысле метафизического *самомышления*、そうである。意思は「無限の反省的復帰」*»бесконечная рефлексия»* である。すなわち、自己への、大文字の「概念」の創造的な帰還 творческий возврат Пнятия к себе である。意思は、その「絶対的な真実性」»абсолютная достоверность» における「魂の同一的な中心」»тождественный центр души» である。意思は、客体の法則закон объектаを、そして、さらにそれ以上に大きなものを、創出создатьする。〈意思は客体そのものを創出*создать*する〉。意思は、客体において〈自己を認識*сознать*し〉、そして、客体を〈自己の〉状態*своё* состояниеとして知るзнать。意思は、さらに、〈無私（無欲）に、対象的に、生活活動を営んでいる〉力та «бескорыстно, предметно живущая« силаであり、この力は、次のことを知っているкоторая знает。すなわち、主体（主観）と客体（客観）は、〈単一の実体（基体）の、普遍的な大文字の「意思」の、様態〉に他ならない、ということをчто субъект и объект суть лишь *модусы единой субстанции, всеобщей Воли*。この意思は、「他在から自由な」精神 дух«свободный от инобытия»、すなわち、大文字の〈理性〉*Разум*、すなわち、「直観的な思惟」»интуитивное мышление» であり、こうした思惟ゆえに、〈認識すること〉*познать* は〈創出すること〉*создать* を意味している。意思は、全ての対象を自己の深淵へと齎し、そして、それ（対象）を、新たな、本質的な、光の中で、〈自己から創出する〉、「〈知性〉」

»интеллигенция», уводящая всякий предмет в свою глубину и *создающая его из себя* в новом, существенном сиянии である。意思は、〈自己を能動的かつ自由に思惟する大文字の「概念」そのものの活力〉*энергия самого Понятия*, мыслящего себя активно и свободно である。意思は、〈最深の、そして、自由な、精神のエレメント〉としての理性の、自己限定 самоопределение разума как *глубочайщей и свободной стихии духа* である。意思は、〈精神の統一的かつ全一的な激情 *единая и цельная страсть* であり、この激情は、自己の適切な水準を発見したが нашедшая свой достойный уровень、いまや、自己の理性的で善き自然本性の十全なる満足を求めている *и ищущая ныне полного удовлетворения своей разумной и благой природе*〉。この満足への道程は、すでにして、〈客観的な〉、そして、さらには、〈絶対的な〉精神の、道程 путь *объективного* и, далее, *абсолютного* духа である。

【〈知性〉の「真実」としての〈意思〉＝そこで人間の主体的魂がその根源的・全体的な渇望を実現する活動・創造へと成熟するところの、思惟する精神の固有の状態

***воля* как «истина» *интеллигенйии* = то особое состояние мыслящего духа, в котором субъективнаядуша человека является созревщей к действию, к творчеству, осуществляющем её коренное и целостное влечение】**

こうしたことが、主体（主観）的な精神の成熟した成果 зрелый иток субъективного духа としての意思である。意思は、知性の「真実」»истина» интеллигенции であり、すなわち、人間の理性的に認識する（知る）状態の最高段階 высшая ступень разумно-познающего состояния человека である。[104] このことは、次のことを意味している。すなわち、意思は、次のような〈思惟する精神の固有の状態〉*особое состояние мыслящего духа* であり、この状態においては、人間の主体（主観）的な魂 субъективная душа человека は、その（魂の）根源的かつ全体的な渇望 её коренное и целостное влечение

を実現 осуществлять する、〈活動〉*действие* へと、創造 творчество へと、成熟 созреть した、ということを。意思は、その、自己を開被 раскрывать し、そして、自己の目的 цель を創出 творять する、そうした実践的な[106]、昂揚 порыв における、そうした〈精神〉[105] дух である。

【思惟（類、一般）＝意思（種、特殊）：「思惟する理性」、自己限定

мысль (род, всеобщее) = воля (вид, особенное) : «мыслящии разум», самоопределение】

ここから、〈思惟と意思〉とを分離 разделять あるいは対置 противопоставлять する人たちはすべて、思い違い（誤解）をする заблуждаться ことになる、という結論が出てくる[107]。実際のところ、意思は思惟の特例 species であり、思惟は自己に意思の意味 значение воли を付与し、意思の基底 основа かつ実体（基体）субстанция に留まる[108]。「思惟活動 мышление なしには、意思はありえず、極めて無教養な人間 необразавнный человек でさえ、かれが思惟 помыслить したかぎりにおいてのみ、意思なのである。他方、動物 животное は、まさしく、それが思惟しないがゆえに、意思を有しえない。」[109]〈意思は「思惟する理性」»мыслящии разум[110]» であり〉、そして、この形においてのみ、意思は自己の自由を確信 свободу утвердить しうるし[111]、そして、自己に真正で適切な内容を報知（賦与）сообщить しうる[112]。

というのは、意思の真正な状態は〈自己限定〉*самоопределение* であるが、真正で絶対的な自己限定は、〈思惟にだけ〉与えられるからである。

【意思＝自己限定：自己の中への意思の反省的自己復帰

воля =самоопределение : саморефлексия воли в себя】

〈自己限定 *самоопределение* は、意思の本質 *сущность воли* であり〉、その生（生活活動）её жизнь、そのエレメント её стихия、その本質的なもの её essentiale である。自己限定と意思は、ヘーゲルの理解では、端的に、一致する。自己を何かに向けて限定しえない意思 воля, которая не способна определить себя к чему-либо は、そのかぎりで、脆弱な意思、意思の欠如、

ある種の「脆弱な力」である。自己ではなく、何か他のものを限定する意思は、何か他のものを限定するために、〈すでに、自己を限定していた〉のである。自己限定は意思の基本的な機能функцияであり、この機能なしには、意思は〈存在しない〉が、それが臨在することでпри наличность которой、意思は〈存在〉を有するбытие иметь。意思活動волениеは、意思が自己限定самоопределяться[113]し、「自己を自己の中に閉じзамыкать[114]」、「自己を自己から満たしнаполнять[115]」、「自身で自己に内容содержаниеを与え[116]」、「自己の中へ反省的に復帰され」»рефлектированной в себя[117]»、「自己と同一化され」ている »тождественной с собою» оказываться[118]、という点に存する。意思の本質は、意思が自己にだけ服従повиноваться[119]し、そして、自己と結合сливаться しながら[120]、「自己のもとに」留まる[121]、という点に存するのである。

【理性的意思＝自由 → 自由と必然の二律背反の解決：意思の概念あるいは実体性を構成する自由＝あらゆる他在からの独立性：意思は意思を制限する他在を有さないが、自己の創造性において、自己に帰還する

разумная воля = свобода → разрешение антиномии свободы-необходимости : свобода, составляющая понятие или субстанциальность воли = независимость от всякого инобытия : воля не имеет ограничивающего её инобытия, но в творчестве своём возвращается к себе.】

このことは、〈意思は自由である〉ということをчто *воля свободна*、意味している[122]。というのは、自己限定は自由そのもの以外ではないсамоопределение есть не что иное, как сама свободаからである。自活的かつ自立的に自己を限定しない意思воля, не определяющая себя самодеятельно и самостоятельноは、「意思」»воля» ではなく、実現された「束縛（拘束）」»неволя»である。これによって、ヘーゲルにとって、自由と必然の二律背反антиномия свободы-необходимостиは解決されるразрешаться。自己の真正かつ十全な意味における意思は、すなわち、理性的な意思разумная волаは、

自由である。というのは、自由は、意思の自然本性を[123]、「意思の概念 понятие あるいは実体性（基体性）субстанциальность」[124]を、構成 составлять するからである。自由は意思の本質である[125]。重力 тяжесть が身体の本質 сущность тела であり[126]、「確信」»уверенность» が自己意識の本質 сущность самочознания であるように[127]。意思が自由であるのは、〈意思に固有なことは、自己にのみ関係して、その他の如何なるものにも関係しない〉からである[128]。意思が自由であるのは、あらゆる他在からの独立性（非依存性）независимость от всякого инобытия[129] が意思のエレメントを構成するからである。理性の水準の上で生きて（生活活動を営んで）いる意思は、全く自己の深奥を志向し、それゆえに、意思は真正な無限性を領有する истинной бесконечностью обладать。「意思自身は自己の対象である」[130]が、このことが意味しているのは、意思は意思を制限する他在を有さないが、自己の創造性 творчество において、自己に帰還する к себе возвращаться、ということである[131]。

【自己固有の本質への意思の指向性 обращённость воли к её собственной сущности】

意思の固有の本質への意思の指向性 обращённость は、次のように表現されうる。すなわち、〈意思は、自己の本質の理性的かつ体系的な開被を介して実現される、自己の意思活動の対象である〉что *она есть предмет своего воления, осуществляемый посредством разумного и систематического раскрытия своей сущности*、と。

【十全な自己限定と絶対的な自由を欲する理性的意思：意思の「限定」、「内容」、「目的」、「現存」としての自由：「即自的」かつ「対自的」な存在を有する意思 →〈客観的精神〉として、有機体化された普遍性において、すなわち、法権利、習俗規範性、国家において、「自由の世界」を自己に創出する意思

разная воля, желающая полного *самоопределения и абсолютной свободы*： свободна как «определение», «содержание», «цель»,

«существование» воли : воля, которая имеет бытие «по себе» и «для себя» → воля, которая как *объективный дух* создает себе «мир свободы» — в организованной общественности, в праве, нравственности и госдорстве】

理性的な意思が欲しているところのものto, чего желает разумная волянは、〈その意思固有の〉本質*её собственная сущность*である。すなわち、そうした意思は、十全な〈自己限定と絶対的な自由〉*самоопределение и абсолютная свобода*を欲しているのである。理性的な意思に固有なのは、その（そうした理性的な意思の）「限定」»определение»、その「内容」»содержание»、その「目的」»цель»、そして、その「現存態」»существование»は、自由свободаである、ということである[132]。意思そのものは、自己に目的を定立ставитьし[133]、そして、意思の目的は、意思そのもの、すなわち、自由、である。このことは、意思が自己の真正な本質を認識опознатьした、ということ、意思が存在（現存）бытиеを有しているのは、「自己において（自己によって）（即自的）」»по себе» であるのみならず、「自己のために（独力で）（対自的）」»для себя» でもある、ということ、こうしたことを前提にしているпредполагать[134]。このような意思は、主体的（主観的）に成熟した意思である。こうした意思は、自己から抜け出し、〈客観的な精神〉объективный духとなり、自己に、「自由の世界」»мир свободы»[135]を創出する。— 有機体化された普遍性（公共性）организованная общественностьにおいて、法（権利）право、習俗規範（人倫）нравственность、そして、国家государствоにおいて。

【意思の「概念」＝〈思弁的に自己解放した、人間の理性的な思惟活動〉：意思＝絶対的自己限定の実現に向けて、それ自身自己を限定した、理性の自己限定

«понятие» воли = *спекулятивно освободившееся разумное мышление человека* : воля = самоопределение разума, само определившее себя к

осуществлению абсолютного самоопределения】

こうしたものが意思の「概念」»понятие» である。この概念は、〈思弁的に自己解放した、人間の理性的な思惟活動〉であり、この思惟活動は、〈十全な満足を、すなわち、絶対的な自由を、創造的に希求（志向）*стремиться* する〉。意思は、絶対的な自己限定の実現に向けて、それ自身自己を限定した、理性の自己限定である。

【成熟した意思　→　自己において二重の自然本性（思弁的・無限的、経験的・有限的）を引き入れている活動現実的な「世界形象」

зрелая воля → действительный «образ мира», вмещающий в себе двойную природу：спекулятивную, или бесконечную, и эмпирическую, или конечную】

こうしたことの中に、〈成熟した意思の本質〉*сущиность зрелой воли* が、あるいは、意思の「概念」»поняти» が、存する。しかしながら、意思の成熟した状態зрелое состояниеと並んで、明らかに、諸々の未熟な、より低い状態もまた、在りうる。「意思」は、〈人間の意思〉であること、一定の〈人間的な本質の統一的な状態〉*некое целостное состояние человеческого существа* であること、このことを視野に入れておくことが必要である。このことは次のことを意味している。すなわち、〈成熟した意思〉は、自己と並んで未熟な「諸現象」を許容し、そして、自己において、〈二重の自然本性〉を、すなわち、思弁的な、あるいは、無限のそれを、そして、経験的な、あるいは有限なそれを、引き入れているперестать、活動現実的な「世界の形象」действительный «образ мира» である、ということを。

【意思＝「無限に結実（受精）される」力：「全ての諸限定と諸目的」を、自己の中に保持し、自己から産出する、「原初的な種子（萌芽）」：自由な自己限定として自己を実現する意思 → 自己の「現存態」を克服した「本質」から成る、「活動現実的な形象」の意味を、受け取る意思：意思の概念と意思の対象との一致（同一性）→ 理念

воля = «бесконечно оплодотворённая» сила : «первоначальное зерно», содержащее в себе и производящее из себя «все определения и цели» : воля, осуществляющая себя как свободное самоопределение → воля, которая получит *значение* «действительного образа», состоящего из «сущности», победившей своё «*существование*» : совпадение (тождество) «понятия» воли и предмет воли → «идея»】

意思は、神性 Божество の他のあらゆる変容 видоизменение がそうであるように、次のように、存立 обстоять しうるし、活動 действовать しうる。あるいは〔一方で〕、顕現されない隠された形姿（形式）において、в непроявленном, скрытом виде 人間的な本質の深淵の中に留まりながら、そして、自己の自然本性を、もっぱら「即自的 сама по себе（an sich）に」承認（確立）утверждать しながら。あるいは〔他方で〕、開示され実現された形姿（形式）において、в раскрытом осуществленном виде 意識や自己意識の水準で、на уровне сознания и самосознания「即且つ対自的に сама по себе и для себя（an und für sich）」〔自己の自然本性を承認（確立）しながら〕。とはいえ、やはり、自己の、隠された、顕現されていない、「限定されていない」形姿（形式）においても、в своём скрытом, непроявленном, «неопределенном» виде 意思は意思であることをやめない она не перестает быть волею。意思は、あたかも「中性的」»нейтральной» であるかのような、しかし、「無限に結実（受精）される」、力に »бесконечно оплодотворённой» силой、すなわち、「全ての諸限定と諸目的」を、自己の中に保持し、自己から産出する、「原初的な種子（萌芽）」[136] に »первоначальным зерном»、содержащим в себе ипроизводящим из себя «все определения и цели» 留まっている。自己の本質を開示 раскрыть し、認識 осознать するために、自由な自己限定として как свободное самоопределение 自己を実現 себя осуществить するために、意思は、自己の経験的な本質を受け取り、一貫して働かせ проработать、自己を「現存するもの」に関与させ приобщить себя

«бытию»、〈現存する意思〉となりстать *существующей волей*、〈そして、自己の現存態というエレメントを克服 *и победить элемент своего существования*〉しなければならない。そのときにのみ、意思は、自己の「現存態」を克服した「本質」から成る「活動現実的な形象」の意味значение «действительного образа» を受け取る。そのときにのみ、意思は、ヘーゲルの表現によれば、「理念」»идея» となる[137]。というのは、意思の「概念」»пнятие» と意思の「対象」»предмет» とは、合致совпадать し、そして、同一性тождество へと向けられているпревратяться からである[138]。

【意思の成熟過程＝意思の「普遍的本質（一般（普遍）的意思）」と「個別的形姿・現象（特殊的意思）」との間の思弁的同一性の確立

процесс созревания воли = установление спекулятивного тождества между «всеобщей сущностью» (всеобщейволей) и «единичным явлению» (особенной волей)】

意思のこうした成熟過程を、ヘーゲルは次のように表現することが稀ではない。すなわち、意思の「普遍的（一般的）本質」は「個別的（単一的）な形姿（形式）をとるが、「個別的意思」は、自己の中に沈潜（下降）して、「一般的意思」との自己の思弁的な同一性を確立（確証）する、»всеобщая сущность«（воли）принимает вид «единичного явления», а «единичиная» воля, углубляясь в себя, устанавливает своё спекулятивное тождество со «всеобщей волей» と。こうした過程は、すでに、主観的な精神の諸限界の向こうへと越え出でていく。そして、このことは精神の深淵において始まっているのであるが。

【「本質」（普遍的なもの）と「現存」（個別的なもの）との、「概念」と「現実（実在）」との、同一性 → 活動現実的な「世界形象」＝ 現実的（実在的）「理念」

тождество «сущности» (всеобщего) и «существования» (единичнего) → действительный «образ мира» = реальная «идея»】

「一般的意思」»всеобщая воля» の本性を正確に理解（概念把握）понятьするためには、「神」Богと世界との生（生活活動）жизнь についてのヘーゲルの基本的な見解（観点）воззрение を考慮しておかなければならない。この見解（観点）に従えば、神性Божество は〈全ての存在の一つの「普遍的（一般的）な実体（基体）〉*единая «всеобщая» субстанция всякого бытия* であるが、世界の諸現象、諸々の事物と魂、植物、動物、人間は、従属させられた諸々の「単一性（個別性）」、「偶因性」подчинённые «единичности», «акциденции»、あるいは、より正確にいえば、こうした実体（基体）の生きた（生活活動を営む）「諸様態」живые «модусы» である。かくして、〈一般（普遍）的なもの〉*всеобщее* はその生きた（生活活動を営む）本質 *живая сущность* としての個別的なもの *единичное* の中へ入っていくが、しかし、個別的なものはその生きた（生活活動を営む）部分 *живая часть* として一般（普遍）的なものの中へ入っていく〉[139]。「一般（普遍）的なもの」はすべての個別性を刺し貫く絶対的に実在的（現実的）で創造的なエレメント абсолютно-реальная, творческая стихия, пронизывающая всякую «единичность» であるが、しかし、その個別性の中に隠され、その個別性の諸限界によって個体化されたそれ（エレメント）скрытая в ней и индивидуализированная её пределами である。これらの諸限界は自由な実体（基体）が自由になることを、世界において実体（基体）の本性に対応するように〈現象する〉*явиться* ことを、許さない не позволять。自由な一般（普遍）性は、それが他在という緩慢なエレメント косная стихия инобытия を克服 преодолеть することに成功しないうちは、あるいは、同じことであるが、「個別性」»единичночть» が自己において自己の一般（普遍）的な本質を認識 свою всеобщую сущность не осознать せず、その精神的かつ絶対的な力に降伏しないうちは、「単に本質」»только сущность» に留まる[140]。そこで、一般性（普遍性）は、「単に本質的なもの」であることをやめ、「現象した本質的なもの」»явившаяся сущность» になる――〔すなわち〕「本質」と

「現存」との、「概念」と「実在性（現実性）」との同一性 тождество «сущности» и «существования», «пнятия» и «реальности» に、すなわち、活動現実的な「世界の形象」действительный «образ мира» に、あるいは、繰り返しいえばтрижды、実在的（現実的）な「理念」реальная «идея» に、なる。[141]

【生きた（生活活動を営む）具体的な全体性としての「一般的（普遍的）なもの」→ ①そこでは「個別的意思」と「一般的意思」が融解している、「具体的な習俗規範性」、②そこでは「信仰する魂」が「神の生と愛」を受け入れる、絶対的宗教 → ①活動現実的な人間の〈意思〉のエレメント（『法権利の哲学』）、②純粋で神的な〈思惟〉の実在性のエレメント（『論理学』 «всеобщее» как живая, конкретнаяое тотальность → ①»конкретная нравственность», где «единичная воля» сливается со «всеобщего волею», ②абсолютная религия, где «верующая душа» приемлет «жизнь и любовь Бога» → ①элемент «действительной» человеческой *воли* («Философия Права»), ②элемент реальности чистой, божественной *мысли* («Логик»)】

この秩序порядокは、「世界」において、さまざまな諸水準で、あるいは、同じことであるが、さまざまな「諸エレメント」において、実現化осуществляться する。しかしながら、この秩序は、固有の構造стройность を伴って、そこでは「個別的意思」と「一般的意思」とが合流する、〈具体的な習俗規範態（人倫）〉においてв *конкретной нравственности*、そして、そこでは「信仰する魂」»верующая душа» が自己の中に「唯一神の生と愛」»жизнь илюбовь единого Бога» を受け入れる、絶対的な宗教において、開示される。ヘーゲルは、人びとの習俗規範（人倫）的な生活活動についての教説учение о нравственной жизни людей にのみ、考え抜かれ、かつ成熟した、表現を与えることに成功したにすぎず、宗教についての体系的な教説を、粗い素描の形で残した。したがって、生きた具体的な全体性としての「一般

的なもの」についての教説 учение о «всеобщем» как живой, конкретной тотальности は、厳密にいえば、かれの『論理学』*Логик* と『法権利の哲学』*Философия Права* の成果として残されている。その教説は、前者では――純粋で神的な〈思惟〉の、実在性（現実性）のエレメント элемент реалности чистой, божественной *мысли* において、後者では――「活動現実的な」人間的な〈意思〉の、エレメント элемент «действительной» человекой *воли* において、開示されている。

【人間の魂の〈実体的な根源〉としての一般（普遍）的意思＝自己を思惟する〈意味〉の変容：思惟活動の活動と対象 → 一般的（普遍的）：「概念」、「理念」、思弁的思惟

***всеобщая воля* как *субстанциальный корень человеческой души* = видоизменение мыслящего себя Смысла мышление по деятельности своей и по предмету своему → всеобще : Понятие, Разум, спекулятивная мысль】**

〈一般（普遍）的意思〉は、世界における、というよりも、まさしく〈人間〉における、〈神的な[142]〉エレメントの、固有の状態である。*Всеобщая воля* есть особое состояние *Божественной* стихии в мире и притом именно в *человеке*. これは、大文字の「概念」Понятие そのものの、大文字の「理性」Разум あるいは思弁的な思惟 спекулятивная мысль の、変容 видоизменение である。人間的な魂の〈実体的な根源〉としての意思 воля как *субстанциальный корень* は、まさしく、それ（そうした意思）は自己を思惟する大文字の〈意味〉の変容 видоизменение мыслящего себя Смысла であるがゆえに[143]、〈一般的〉*всеобща* なのである。というのは、思惟活動 мышление は――自己の活動性 деятельность と自己の対象 предмет とに従って――一般的 всеобще であるからである。

【〈「概念」の律動と目的によって生活活動を営み、諸個別的意思を「特殊化」の道程によって自己から創出し、自己の自由を実現する、一般（普遍）的な

意思〉

всеобщая воля, которая живёт ритмом и целью Понятия, исоздает единичные воли из себя, и осуществляет свою свободу】

それゆえに、一般的意思は、〈「概念」の律動と目的によって生活活動を営む〉。一般的意思は、諸々の個別的意思を、「特殊化」の道程 путь «спецификации» によって、自己から創出する。一般的意思は、諸々の個別的意思の隠された、生きている（生活活動を営んでいる）、本質として、それらの個別的意思の中へ入っていき、それらを自己の生きている（生活活動を営んでいる）部分として、自己の中に包含する。一般的意思は、一般的な目的と一般的な対象を――自己と自己の自由とを――有し、そして、自己の自由を実現しながら、自己と自己の諸現象との間の、すなわち、人びとの諸々の個体的な意思の間の、「同一性」を、達成する。

【「一般（普遍）的実体（基体）」と「個別的現象」との具体的同一性（合致）＝「即かつ対自的に」存在する真実の「一般（普遍）的意思」→ 真実性：「一般（普遍）的意思」と「個別的意思」の融合あるいは同一化：主観的精神と客観的精神の諸限界における意思の神的に理性的なエレメント

конкретное тождество (совпадение) «всеобщей субстанции» с «единичным явлением» = истинная «всеобщая воля», сущая «по себе и для себя» → истина : сращение или отождествление между «всеобщей волей» и «индивидуальной волей» : божественно-разумная стихия воли в пределах субъектвного и объективного духа】

このことは、なによりもまず、次のことを意味している。すなわち、「自己により（即自的に）存在している実体」»по себе сущая субстанция» としての一般的意思と「自己だけで（対自的に）存在している現象」»для себя сущие явление» としての個別的意思との間で区別をしなければならない、ということを。それらの〈具体的な〉同一性だけが、「真実性」»истина» を、すなわち、「一般（普遍）的な実体（基体）」の「個別的な現象」との合

致совпадение «всеобщеи субстанции» с «единичным явлением» を、即かつ対自的に存在する真実の「一般的意思」をистинную «всеобщую волю», сущую «по себе и для себя» (an und für sich)、与える。「一般的意思」と「個体的意思」との間の融合сращениеあるいは同一化отождествлениеは、二度、完遂совершаться される。一度目は、「主観的精神」の諸限界пределыにおいて、二度目は、「客観的精神」の諸限界において。人間は、自己の中で、意思の神的に理性的なエレメントをбожественно-разумную стихию воли、二度見出す。はじめに、〈かれ（人間)〉を、個体的に自由な意思として〈自己〉を認識することへと導く、自己の孤立的（閉じられた）な生活活動においてв своей замкнутой жизни, приводящей *его* к признанию *себя* индивидуально-свободною волею、次に、〈全ての〉人々を、「国民的精神」の〈統一的な思弁的エレメント〉として自己を認識することへと導く、交際と公共的（社会的）な生活活動においてв общении и общественной жизни, приводящей *всех* людей к признанию себя—*единою спекулятивною стихиею «народного духа»*

【「主観的精神の即自的に存在する実体（基体)」としての意思＝自己性の権化：感覚、情念、知覚、意識に内在する理性的自己限定（思惟活動）の一般性

«воля как по себе сущая субстанция» субъективного духа = «гений самости»: чувству, страсти, восприятию присущая всеобщность разумного самоопределения (мышления)】

はじめにいえば、意思は、〈主観的精神という「即自的に存在する実体」〉*»по себе сущая субстанция» субъективного духа* である。意思は、その深淵の中にв его глубине、「その自己性の権化」»гений его самости» として、その真実の「概念」его истинное «понятие» として、隠されているскрыта[144]。人間は、しばしば、このことを知らないし、自己の真実の、理性的に意思的な、自然本性を、見ていないし、そして、認識してもいない。このとき、かれは

自己を感覚чувство と情念страсть によって限定определять し、放浪（彷徨、迷走）の道程に踏み込んでいるна путь блужданий вступать。しかしながら、この放浪（彷徨、迷走）は、事柄の本質を変える状態にはない。理性的な自己限定の一般（普遍）性は、〈その真正の、解放されない自然本性〉に、あるいは、〈形式的〉にいえば、その予め定められた必然性に、〈留まっている〉[145]。：всеобщность разумного самоопределения остается его подлинною не освобожденною природою, или, формально говоря, —его предначертанным долженствованием. 思惟なしには、人間は存在しない。思惟 мысль は、人間の中に、すでに知覚と意識の段階において на степени восприятиия (Wahrnehmen) и сознания、貫通（突破）しているпробиваться。〈思惟〉*мысль* は、すでに〈一般性（普遍性）の状態〉*состояние всеобщности* である。自己限定する思惟活動である精神のエレメントстихия духа самоопределяющегося мышления は、人間の直接無媒介的に個人的（私的）な生活においてさえ、даже в непосредственно-личной жизни человека あくまで「一般的なもの」»всеобщее» である。

【生活活動における、「即自的に存在する実体（基体）」としての一般（普遍）的意思と「対自的に存在する現象」としての個別的意思との差異

различие между всеобщего волею как «по себе сушей субстанцией» и единичною волею как «для себя сущим явлением» в жизни】

しかし、まさにこうした生活活動において、はじめて、「即自的に存在する実体」としての一般的意思と「対自的に存在する現象」としての個別的意思との間の差異различие が露出する。「即自的な」意思そのものは、あくまでも理性的、一般的、そして、自由な意思である[146]。しかし、自己の「現象」においては、そうした意思は、実体から切り離された、個別的な、「無媒介的な、あるいは自然的な意思」であることが明らかになる[147]。自己の内奥の諸道程では、意思は「無限の力」として、生活活動を営んでいるが、外的な現象の諸道程においては、経験的な内容の多様性によって充たされた[150]、「有限」

で、「形式的」[148]な[149]、意思に、留まっている。

【二つの意思の間の裂け目（本質・現象、無限・有限）の治癒（回復）

исцеление разрыва между двумя волями (сущность-явление, бесконечное -кончное)】

二つの意思の間のこうした裂け目разрывは、さらにいえば、「主観的精神」の諸限界の中で、次のことによって、治癒исцеляться される。すなわち、十全な満足を追求する有限な意思は、自己の内へと向かい、自己の無限に理性的な本質を認識する、ということによって。こうした意思は、「即自的にも」、「対自的にも」自由になる。そうした意思の中に隠されていたものは、主観的精神の生活活動の所有物（獲得物）достояниеかつ条件（方式、手段）способとなる。意思は、全体的に（一貫して）自己を自由に向かって限定し、そして「客観的精神」の領域の中に転移переходитьしていく。

【意思（自由、普遍性）の主観（主体）性から客観（客体）性への転移

переход воли (свободой, всеобщности) из субъективности к объективности】

この「客観（客体）性」への転移переход к «объективности» は、次のことを意味している。すなわち、理性的かつ一般的な精神の本質は、〈精神自身のために（だけで）客観（客体）的に〉ならなければならない、ということを。魂は次のことを把捉постигатьする。すなわち、魂は、〈人間的な単子（モナド）〉*человеская монада*としては、内的に自由внутренне свободаであり、そして、このことに従って、自己の閉じられた現存態の諸限界を超え出ていくзапределы своего замкнутого существование выходить、ということを。意思は、すでに、自己の主観（主体）的な一般（普遍）性を認識していたし、そして、自己を、特異に矛盾した状態においてв своеобразно-противоречвом стоянии、見ている。意思は、それ自身、内的に一般（普遍）的で実体（基体）的な力внутренне-всеобщая субстанциальная силаとしては、諸々の「外的な」現存態の全体的な多様性に対立し、целому множеству «внешних» существований противостоятьそして、それ自身、主体（主観）的な単子（モナド）の

諸限界に制限（拘束）ограничитьされている。あきらかに（見たところ）、最後まで（とことん）、主体（主観）的精神によって打ち負かされた他在инобытие, побежденное субъективным духомは、その主体（主観）的精神の前で、〈新たに立ち上がり〉*вновь встает*、そして、このことが、主体（主観）的精神から、更なる自己解放самоосвобождениеを要求требовать する。主体（主観）的に「自由」で「一般（普遍）的」な意思は、〈客体（客観）的に〉「自由」で、かつ、〈客体（客観）的に〉「一般（普遍）的に」ならなければならない。

【客体性（客観性）— ①人間、②事物、③諸活動の諸関係の成果としての習俗規範態

объективность— ①люди, ②естественные веши, ③нравственности как итог отношений деятельностей】

そこに意思が向けられているところの客体性（客観性）は、〈三重の〉性格を有している。第一に、このことは、多数の個別的、個体的な諸意思、すなわち、「他の」人びとである。第二に、このことは、意識に現前している多数の「自然的な諸事物」、すなわち、そこに人間が生活しているところの自然的な諸条件の、総体である。第三に、このことは、主観的な意思そのものにおいて、諸々の他の人びとや事物との交流общениеから燃え上がっている、個人的・人間的な多数の諸要求потребностиや諸傾動（愛着、渇望、憧憬）влеченияである。これら全ては、主体（主観）的に成熟した意思の諸々の現存態のための「外的な」材料を形象化し、こうした意思に、更なる上昇の道程путь дальнейшего восхожденияを予め定めているпредначертывать。

【意思：〈実体・現存〉Substanz-Existenz、〈本質・現象〉Wesen-Erscheinung、〈即 自an sich・対 自für sich〉、〈一 般・特 殊〉Allgemeines-Besonderes、〈全体・部分Ganze-Teil（全体性・個体性Totalität-Individualität）〉、〈一・多〉Eins-Viel、〈内容・形式 〉Inhalt-Form（〈内・外〉Inneres-Äußeres）、〈静態・動態〉Statik-Dynamik、〈主体・客体〉Subjekt-Objekt、〈感性・悟性〉Sinnlichkeit

-Verstand、〈自然・人為（社会）〉Natur-Art（Gesellschaft）：〈諸器官（機関）・有機体〉Organe-Organismus―〔矛盾 Widersprüche（二律背反 Antinomien）― 相互限定 wecselseitige Bestimmung〕→ 理性的一般（普遍）性 vernünftige Allgemeinheit・思弁的同一性 spekulative Gleichheit（Übereinstimmung）― 理性的自己限定 vernünftige Selbstbestimmung

воля：субстанция―существование, сущносиь―явление, по себе―для себя (an sich―für sich), всеобщее―особенное, целое―часть (тотальность―индивидуальность), одное―многое, содержание―форма, внутренность―внешность, статика―динамика, субъект―объект, чувство―рассудок, природа―искусственность (общество)：органы―организм：противоречие (антиномия), взаймоопределение→разумная всеобщность, спекулятивное тождество ― разумное самоопределение】

こうした道程 путь は、次の点に存する。すなわち、意思 воля は、自己の新たな「客体（客観）的な」諸対象における〈理性的かつ一般（普遍）的な自然本性を開被し〉*открыть разумную и всеобщую природу*、そして、〈社会的に共生している全ての人びとにとって一つである〉ところの、さらにより深い一般性（普遍性）を、自己の中に認識 осознать в себе ту, ещё более глубокую *всеобщность*, которая *едина для всех людей, стоящих в общественном сожительстве* しなければならない、という点に。このことを達成するということは、すでに理性的かつ一般（普遍）的な主体 субъект, уже разныйи всеобщий と、多数の非理性的な個別的な諸現存態の形姿で現前している対象 предмет, предстоящий в виде неразумного множества единичных существований との間の、「矛盾」»противоречие» を〈取り除く〉*снять* ことを、意味 знать している。このことはまた、主体において成熟している、一般（普遍）的で〈実体（基体）的な内容〉と、その主体の生活活動の――個人的、有限的、被制限的な（制限された）――「外的な形式」との間の「矛盾」»противоречние» между всеобщим, *субстанциальным*

содержанием, созревшим в субъекте, и *внешней формой* его жизни — личною, кнечною и ограниченною を、取り除くことを、意味している。個体的な意思 индивидуальная воля は、次のことを意味している。すなわち、そうした意思は、〈それ自身自己に即して（即自的に）*само по себе*〉（すなわち、他の諸々の人びとや事物から切り離されてв отрыве от других людей и вещей）一般（普遍）的かつ理性的*всеобща и разумна* であり、そして、単に「即自的」»по себе» である、（すなわち、自己の総体的、実体（基体）的な本質に即しているпо своей сокровенной, субстанциальной сущ ности）のみならず、「対自的」»для себя» でもある（すなわち、自己の経験的な自己意識に即しているпо своему эмпирическому самосознанию）、ということを。いまや、それ（その個体的な意思）に現前предстоять しているのは、次のことである。すなわち、他の人びとにおける同じ一般性（普遍性）を発見することнайти ту же всеобщность в длугих людях、すなわち、〈それ（その個体的な意思）が自己の中に認識*познать* していることを、かれらの中に認識すること〉、そして、〈かれらの中で〉、まさにそうした意思固有の本質を成している、理性的な自己限定という、まさに同じ統一的エレメントそのものが、生活活動を営み、創造的に展開されている〉что в нх живёт и творчески раскрываеться та же самая, единая стихия разумного самоопределения ということを、認知признатьすること、これである。主体（主観）的な意思 субъективная воля は、〈諸々の他の主体（主観）的な意思との自己の思弁的な同一性*спекулятивное тождество* を認識*познать*〉しなければならない。主体（主観）的な意思は、次のことを確信 убедиться し、認知 признать しなければならない。すなわち、諸々の個体的な意思の多数性 множество индивидуальных воль は、自己の〈外見（顕現）〉において（に即して）по своей *внешней видимости*、自己の〈現象〉において（に即して）по свему *явлению*、多数性であるにすぎず、〈本質において（に即して）〉*по существу* は、この多数性は、〈実在的（現実的）に分離されているのではなく〉не

разъединено реально、一つの統一的な大文字の〈「一般(普遍)性)」〉をединую *Всеобщность*、統一的な一般（普遍）的意思、民族的（国民的）意思единуюв сеобщую волю, народный дух（Volksgeist）を、形象化образовать している、ということを。この統一的な一般（普遍）的意思единая всеобщая воля は、〈各々の個別的意思の中に〉*в каждую единичную волю*、その各々の意思の生きている（生活活動を営んでいる）本質としてв качестве её живой сущности、〈入り込み〉*входить*、そして、〈自己の中に、全ての個別的意思を〉、自己の生きている（生活活動を営んでいる）諸器官（機関）としてв качестве своих живых органов、〈包摂（包括）*включать* する〉、〈精神的な実体（基体)〉*духовная субстанция* である。

【一般（普遍）的意思の一般（普遍）性 → ①「実体（基体)」、「概念」、「意味」、②主体（主観）的精神の本質、③統一的、理性的に意思的、精神的なエレメント

всеобщность всеобщой воли → ① Субстанця, Понятие, Смысл, ② сущность субъективного духа, ③ единая, разумно-волевая, духовная стихия】

こうしたことに従えば、一般（普遍）的意思всеобщая воляは、〈三重に〉自己の名前を正当化опрадывать している。それが一般（普遍）的всеобща であるのは、第一に、それが、〈ありとあらゆる存在の（統一的な）実体（基体)〉единая *субстанця всяческого бытия*、大文字の「実体（基体)」そのものсама Субстанция、大文字の「概念」そのものсамо Понятие、であるからである。それは神的な大文字の意味そのものсам божественный Смысл である。それが一般（普遍）的であるのは、第二に、それが〈主体（主観）的精神〉の、この精神の、全ての状態や限定の、全てに浸透する本質всепроникающая сущность субъективного духа, всех его внутренних состояний и определений であるからである。それが一般（普遍）的であるのは、第三に、それが、〈多数の〉人たちの、多数の個体的な意思の、統一

的な、理性的に意志的な、精神的な、エレメントединая, разумно-волевая, духовная стихия множества людей, множества индивидуальных воль であるからである。これは、理性的な意思活動の、全ての人々にとって一般（普遍）的な、力общая всем люям сила разумного волениеである。しかし、この力が一般的（普遍）であるというのは、各々の人間に「自己の意思」があるが、多くの人びとには「等しい魂の能力」»одинаковая душевная способность» がある、という意味においてではなく、〈大文字の「意思」は実在的（現実的）に統一的〉であるが、諸々の個体的な意思は、これ（この大文字の「意思」）の特殊的な変容（様態変化）である、что *Воля реально едина, а индивидуальные воли суть её специфические видоизменение* という意味においてである。

【民族的精神としての一般（普遍）的意思：個体的意思の課題＝自己を民族的精神の器官（機関）として認識すること：個体的意思と一般的意思の同一性＝（他在からの）客観的自由

всеобщаяволя как народный дух： задача индивидуальнойволи ＝ признать себя органом народного духа： тождество индивидуальной воли ивсеобщой воли ＝ объективная свободна от «инобытия»】

統一的な一般（普遍）的な意思のこれらの特殊な「諸分離（隔離）態」специфические »обособления» единой всеобщей волиは、その（一般（普遍）的な意思の）、多かれ少なかれ忠実（貞節）性を伴う、神的な自然本性をеё божественную природу с болшего и меньшею верностью、表現выражатьしうる。個体的な意思индивидуальная воляは、それが統一的な実体（基体）の「現象」»явление» や「器官（機関）」»орган» である、ということを、知りえずне знать、意識しえずне сознавать 、推測（仮定）さえしえないдаже не предполагать мочь。しかしながら、こうした誤解（思い違い）заблуждениеは、事柄の本質を変ええないне в состоянии изменить сущность дела。民族的精神という一般（普遍）的意思всеобщая воля народного

духаは、いつも、あくまでも統一的な意思の実体（基体）субстанция единичной волиであるが、しかし、〈もっぱら「即自的に」存在するにすぎない〉、〈隠された〉実体（基体）*скрытая* субстанция, *сущая лишь «по себе»* でありうる。個体的な意思の課題は、このことを自覚осознатьし、自己を民族的精神の器官（機関）орган народного духаとして認識признатьすることにある。そのとき、個体的な意思は、一般（普遍）的な意思との、そして「他の」人びととの、自己の同一性своё тождество со всеобщей волей и с «другими» людьми を、把捉（理解）постигнуть する。そのとき、個体的な意思は、それ（その個体的な意思）が、自己固有の諸限界においてのみならずне только в своих собственных пределах、「客観的な」秩序（序列）においてもまた、но и в «объективном» порядок「他在」から自由свободна от «инобытия» である、ということを理解понятьする。というのは、他の人びとは、その（個体的な意思）の統一的で実体（基体）的な本質と統一（統合）された「共同の諸器官（有機的に組織化された諸機関）」её «соорганы», объединенные с нею единой субстанциальной сущностью であるからである。そのとき、主体（主観）的な精神は、「客体（客観）的に自由」*объективно свободным* стать となり、そして、「即自的」»по себе» かつ「対自的」»для себя» となる。

【実体的種子（本質 ↔ 現象の基本的相関関係）の開花（発展）諸段階：民族精神＝即自的一般（普遍）意思の内的成熟＝思惟の統一的・理性的エレメントの発見：意味は思惟活動に内在する：一般性（普遍性）の個体発生と系統発生の相互限定

ступени раскрывания субстанциального зерна (основного соотношения : сущность ↔ явление) : народный дух = внутренное созервание всеобщо воли по себе = обретение единой, разумной стихии мысли : смысл имманентен мышлению : взаймное определение онтогенетической и филогенетической всеобщности】

かくして、ここで、思弁的な諸段階の基本的な相関関係 основное соотношение спекулятивных ступеней が正当化される опрадываться。後続する状態 последующее состояниеは、いつも、先行する段階の〈現実的（実在的）な本質〉*реальная сущность* предшествующей ступениであり、〔すなわち〕そこ（そうした本質）の中に隠されている、そして、自己の果皮（上皮）からのように、そこ（そうした本質）から、開被（開示）される、その（そうした本質の）実体（基体）的な種子（萌芽）её субстанциальное зерно, скрытое в ней и раскрывающееся из неё, как из своей оболочкиである。こうしたことに応じて、民族的精神という一般（普遍）的意思 всеобощая воля народного духаは、主観（主体）的な意思の基礎 основаниесубъективной волиの中にあるが、主観（主体）的精神はそのことを知らずне знать、そして、このことについて認知 узнатьするのは、〔それが〕理性的な意思の状態 состояние разумной волиにまで内的に成熟 внутренне созреватьし、そして、「客観（客体）性」の領域に入る в сферу «объективности» вступатьときだけである。このことは、次のように表現しうる。すなわち、主観（主体）的な精神は〈自己〉を〈主観（主体）的に一般（普遍）的な〉意思として自覚 *себя* как *субъективно-всеобщую* волю осознатьしたのであり、すなわち、自己自身の中に、次のような〈思惟〉の〈統合（統一）的で〉理性的なエレメントを *единую*, разумную стихию *мысли*、発見（獲得）обрестиしたのである、と。このエレメントは、それ自身がそれ（自己の客体）（意味は思惟活動に内在するсмысл имманентен мышлению）を創出 создатьするがゆえに、自己の客体から〈自由〉*своводa* от своего объектаであり、そして、このエレメントは、〔それが〕全ての〈単子（モナド）の内的な世界〉весь *внутренный мир монады* に、実体（基体）的に浸透 субстанциально пронизыватьしている（意思は、魂の単子（モナド）の理性的な一般（普遍）性である воля есть разумная всеобщность душевной монады）がゆえに、〈一般（普遍）的〉*всеобща* である。しかしながら、いまや、主観（主体）的な精神は、何かより大きなものを、意思

の、「個体発生的な」»онтогенетическую»〔一般（普遍）性〕ではなく、「系統発生的な」一般（普遍）性 »филогенетическую» всеобщность волиを、認識しなければならない。このことは、次のことを意味している、すなわち、〈意思の主観（主体）的な一般（普遍）性〉*субъективная всеобщность воли* は、民族的精神の〈器官（機関）〉としての個体において実現されていた、〈客観（客体）的な（すなわち、社会的に精神的な）一般（普遍）性の、個体的な表現 *индивидуальное выражение объективной*（т.е.социально-духовной）*всеобщности*, осуществившееся в индивидууме как *органе* народного духаである〉、ということを。他の言葉でいえば、各々の分離した人間の理性的な精神 разумный дух каждого отдельного человека は、かれの民族の「一般（普遍）的意思」の、「個別的な様態」、特殊的な変容（様態変化）»единичный модус», специфическое видоизменение «всеобщей воли» его народаである。

【一般（普遍）的意思と個別的意思の統一：三つの諸契機（①一般（普遍）的なもの、②特殊的（特別）なもの、③個別的なもの）の具体的同一性

единство всеобщего воли и единичного воли：конкретое тождество трёх моментов (①всеобщее, ②особенное, ③единичное)】

勿論、実際のところ、「一般（普遍）的意思」は個別的意思に全く対立していない。»всеобщая воля» совсем не противостоит единичной воле. 抽象的に受け取るならばвзятая отвлечённо、一般（普遍）的意思は、抽象的なもの（抽象化）абстракция、純粋の、偏することのない、非限定性[151] чистая, безразличная неопределенность である。まったく同様に、即自的な個別的意思единичная воля сама по себеは、抽象的なもの（抽象化）абстракця、鈍感でдурная、引き離されたотъедиденная、直接無媒介的に私的なнепосредственно-личная、被制限態（制限されたもの）ограниченность である。真実態истинаは、それらの〈統一（合致）〉*единство* に存する。一般（普遍）的意思は、諸々の個別的意思から、構成され、そして存立している

слагаться и стоять。ちょうど、絶対的な第一原理が自己の生きている（生活活動を営んでいる）諸部分から構成されているабсолютная первооснова слагается из своих живых частей[152]ように。個別的意思は、自己の中に、「全ての中で、かつ各々の中で」生活活動を営んでいる一般的、精神的なエレメントを、隠しているскрывать[153]。真実истинаは、いつものようにкак всегда、「三つの諸契機の具体的な同一性の中に」в конкретом тождестве трёх моментов存している。すなわち、①各々の与えられた内容の上に上昇し、全てを自己の中で解決し、無限に反省的に復帰する、原理としての、〈一般的なもの〉*всеобщего* как начала, подъемлющегося над каждым данным содержанием, все в северазрешающего и бесконечно рефлектирующего[154]、②区別し、限定し、そして制限する、原理としての、〈特別（特殊）なもの〉*особенного* как начала различающего, определяющего и ограничивающего[155]、そして、③自己において内容的な被限定性を無限の反省的復帰の権能（威力）に結合する原理としての、〈個別的なもの〉*единичного*, как начала, сочетающего в себе содержательную определенность с властью бесконечной рефлексии[156]——これら三契機の中に。これら三契機は、融合してвсращении、同一の〈引き上げられ、同化された、一般（普遍）的な内容〉によって、生活活動を営んでいる、〈諸々の個別的、人間的な意思の、体系〉*систему единичных человеческих воль,* живущих единым *подъятим и ассимилированным, всеобщим содержанием* を、形象化образовать している。あるいは、同じことであるが、それら〔三契機〕は、〈諸々の人間の個別的意思の体系の上に、自己を差異化し、そして、自己を、諸々の個別的、人間的な意思の体系の上に配置した、民族的精神の統一的実体（基体）〉をединую субстанцию народного духа, дифференцировавщую себя и разложившую себя на систему единичных человеческих воль、形象化している。一般的なものвсеобщеeは、自己の生きた（生活活動を営んでいる）部分としての個別的なものединичноeの中へ入っていき、個別的なものは、自

己の中で、自己の生きた（生活活動を営んでいる）本質としての一般的なものを、保持содержать している。

【主体（主観）的に成熟した意思：他在（客体）との創造的関係—感覚、知覚、貪欲、意識、克服 → 認識と意思による諸客体との理性的同一化：民族的精神という一般（普遍）的意思—精神の客観（客体）的自由への道程—個別的意思と一般（普遍）的意思の実現

субъективно-зрелая воля： творческое отношение с инобытием (объектом) —чувство, восприятие, алчность, сознание, преодоление → разумное отождествление с объектами познанием иволей： всеобщая воля народного духа → путьк объективной свободе духа： взаимоопределяющееся осуществление (образование) единичной воли и всеобщей воли】

主観（主体）的な精神の課題は、いまや、明瞭にならなければならない。主観（主体）的な精神は、諸事物のこうした真実の位置истиное положение を、認識осознать し、そして、我物（自家薬籠中のもの）にしусвоить なければならない。主観（主体）的に成熟した意思 субъективно-зрелая воля は、多数の他の人びとや事物の存在を、「受け入れ」принять なければならない。それ〔主体（主観）的に成熟した意思〕が、すでに、一度は、多数の自己の魂の状態や身体の状態 множество своих душевных и телесных состояний を、受け入れたように。主観（主体）的に成熟した意思は、それらとの、創造的な——知覚 воспринимать し、感覚 чувствовать し、渇望 алкать し、意識 сознать し、そして、克服 преодолевать する——関係の中に、踏み込み вступить、こうしたことにおいて、自己の諸々の愛着（渇望、傾動）влечения を根絶 изжить し、そして、自己の諸客体との〈理性的な同一化〉への道 дорогу к *разумному отождествлению со* своими объектами を、自己に敷設 проложить しなければならない。主体（主観）的に成熟した意思は、認識と意思とによって познанием и волею、他の人びととの自己の同一性 своё тождество

сдругими людьми を、苦難の末に獲得выстрадать しなければならない。〔これは〕自己をかれらの中に、かれらを自己の中に、すべてを一緒に――〈同一の民族的精神によって〉*единым народным духом*――認知признать するためである[157]。そして、最後に、主体(主観)的に成熟した意思は、統一的な民族的精神における創造的な[158] 生活活動によってтворческою жизнью в едином народном духе、本当に、自己に、その民族的精神の一般（普遍）的意思とその一般（普遍）的諸目的[159]とを、〈我物（自家薬籠中のもの）に〉*усвоить* しなければならないし、そして、民族的生活活動の事物的な（事柄に即した）情況вещественную обстановку народной жизни を、民族的精神の従順な身体покорное тело народного духа に、変えпревратить なければならない。これは、〈精神の客観（客体）的な自由〉への道程путь к *объективной свободе духа* である。この自由は、「全ての個別的意思の源泉」[160]としての〈一般（普遍）的〉意思を、意識し、実現することを通じてのみ только через осознание и осуществление *всеобщей* воли как «источника всех единичных воль、達成される достигаться。

【客観（客体）的精神＝主観（主体）的に成熟した意思の様態変化 → 法権利、道徳、習俗規範態

модфикация объективного духа = субъективно-зрелой воли → право, молаль, нравственность】

かくして、法（権利）право、道徳мораль、習俗規範（人倫）нравственность についてのヘーゲルの教説は生起する。客観（客体）的な精神のこれらすべての諸段階は、何よりもまず、主体（主観）的に成熟した意思、すなわち、理性的で、自由で、主体（主観）的に一般的な意思の、諸状態состояния あるいは諸変容（様態変化）модификации である。こうしたことによって、それらの類的な本質их родовая сущность は限定される определяться。

原注（第15章　意思）

1）Enc. III. 12–13.
2）Cp.: Enc III. 54–55.
3）Enc. III. 57
4）Enc. III. 57. 87.
5）Enc. III. 64. 72 – 73.
6）Enc. III. 81–82.
7）Enc. III. 103.
8）Enc. III. 103–105.
9）"einfaches Pulsiren": Enc III. 54 (Z.).
10）"dumpfes Weben": Enc. III. 116–117.
11）Ibidem
12）Enc. III. 117. 119 (Z.). 120 (Z.).
13）Enc. III. 56. 120 (Z.).
14）Enc. III. 120. 142.
15）Enc. III. 142.
16）Enc. III. 151.
17）Enc. III. 149. 151.
18）Enc. III. 151.
19）Enc. III. 147. (Z.).
20）Enc. III. 151. (Z.).
21）Enc. III. 144. (Z.).
22）Enc. III. 151.
23）Enc. III. 54.
24）Enc. III. 151. 152.
25）Enc. III. 166.
26）"dumpf". Enc. III. 164.
27）Enc. III. 162–198.
28）Enc. III. 198.
29）Enc. III. 198–201. 202 – 228.
30）Enc. 229–239.
31）Enc. III. 239. 241 (Z.).
32）Enc. III. 239–240. 54.
33）Enc. III. 239. 240. 241. (Z.). 246 (Z.).
34）Enc. III. 236. 43 (Z.).
35）Enc. III. 40. 249.
36）Enc. III. 43. (Z.). 246–247.
37）Enc. III. 247.
38）Enc. III. 40. 246. 249.
39）"Gewissheit seiner selbst": Enc. III. 249.
40）Ibidem.
41）Enc. III. 253. 249.
42）Enc. III. 249.
43）Enc. III. 250. (Z.).
44）Enc. III. 255–258.

45) Enc. III. 260–261.
46) Enc. III. 261.
47) Enc. III. 262–263.
48) Enc. III. 262–265.
49) Enc. III. 265–268.
50) "Begierde": Enc III. 270.
51) Enc. III. 273.
52) Enc. III. 247. (Z.).
53) См.: Enc. III. 274.
54) Ср. Уже: Lass. II. 445–447.
55) Enc. III. 283.
56) См.: Enc. III. 274–283.
57) Ср.: Enc. III. 283–286.
58) Enc. III. 255.
59) Enc. III. 286.
60) Enc. III. 286–287. 40.
61) Enc. III. 287.
62) Ср.: Enc. III. 288.
63) Enc. III. 288.
64) Enc. III. 288.
65) Enc. III. 289 (Z.).
66) Ср.: Enc III. 291. 296. 297. (Z.). 293. (Z.).
67) Enc. III. 291. 293. (Z.). 45 (Z.). 298.
68) Ср.: Enc. III. 296.
69) Enc. III. 298.
70) Enc. III. 305 (Z.). 301.
71) Enc III. 308–311.
72) Enc. III. 308. (Z.).
73) Enc. III. 311. 312. (Z.).
74) "das eigene Sichgeltendmachen": Enc. III. 313. (Z.).
75) "Sich-hingeben an die Sache": Enc. III. 313 (Z.).
76) Ср.: Enc. III. 318. 319. (Z.).
77) Enc. III. 319 (Z.).
78) Enc. III. 307. (Z.). 321. 322.. (Z.). 322.
79) Enc. III. 323 (Z.). 328.
80) Enc. III. 329.
81) Enc. III. 328 (Z.). 331 (Z.). 329.
82) Enc III. 329. 331. (Z.).
83) Ср.: Enc. III. 331. (Z.). 346.
84) "Bedeutung", "Sache": Enc. III. 346. 347. 351.
85) Enc. III. 346.
86) Enc. III. 347. 348.
87) Enc. III. 346. 352. 353.
88) Enc. III. 352. 353.
89) "das Denken der Intelligenz ist *Gedanken haben*; sie sin dals ihr Inhalt und Gegenstand": Enc III. 353. Курсив Гегеля.

90) Cp.: Enc. III. 353. 353. (Z.). 354 (Z.). 357 (Z.).
91) Enc. III. 354 (Z.). См. Главы первую, вторую и третью.
92) Enc. III. 355.
93) Enc. III. 358.
94) Enc. III. 361. 362.
95) Enc. III. 362.
96) "Selbstbestimmung, als *an sich* seined": Enc III. 363. Курсив Гегеля.
97) Enc. III. 364. 365. (Z.).
98) Cp.: Enc III. 363. 366 (Z.).
99) Enc. III. 367. 367–368 (Z.).
100) Enc. III. 370. 371.
101) Enc. III. 371. 372.
102) Enc. III. 372. 373. "Die Glcückseligkeit".
103) Cp., напр.: Recht. 60–61. 365.
104) Cp.: Enc. III. 373. Enc. I. 397.
105) Cp.: Niet. 340. Enc. III. 359 и др.
106) Cp.: Niet. 340. Enc. I. 397. Enc. III. 373.
107) Cp.: Enc III 359. Recht . 38.
108) "in Wahrheit ist das Denken das sich selbst zum Willen bestimmende und das Erestere bleibt die Substanz des Letzteren". Enc. III. 358 (Z.). Cp.: Recht. 49. 314Ph. G. 11.
109) Enc. III. 358. (Z.)
110) Recht. 49.
111) Recht. 57.
112) Enc. III. 359. Recht. 49.
113) Cp.: Enc III. 359. Recht. 149. Rel. I. 77.
114) "sich in sich beschliessend". Enc. III. 359.
115) "sich aus sich erfüllend". Enc III. 359.
116) "sich selbst den Inhalt gebend". Enc III. 359. 385. Recht. 48. 49.
117) Recht. 153.
118) Recht. 152. 153.
119) Cp.: Ph. G. 46.
120) Recht. 42.
121) Enc. III. 359.
122) Enc. III. 359. Recht. 56. 152. Ph. G. 46. Rel. I. 77 Смю главу тринадцатуюю
123) Enc. III. 250. (Z.).
124) Recht. 42.
125) Cp.: Recht. 56. 61. 148 и др.
126) Recht. 42.
127) Enc. III. 250. (Z.).
128) Recht. 58.
129) Recht. 58.
130) Recht. 57–58.
131) "nur in sich zurückgekehrt ist". Recht. 58.
132) Enc. III. 359. 360. 'Z.). Recht. 62.
133) Recht. 45.

134) Recht. 46. 58.
135) Enc. III. 360. (Z.).
136) Cp.: Recht. 48.
137) Cp. Напр.: Recht. 132. 149. 171; cp.: Recht. 48. 145. 148 и др.
138) Enc III. 373; cp.: Recht. 62. 149. 210.
139) См. главу пятую.
140) См. главу тринадцатую.
141) См. главу двенадцатую.
142) Ср., напр.: Recht. 334. Ph. G. 40.
143) Cp.: Enc, III. 359. 359. Recht. 49. Ph. G. 38. Rel. I. 77.
144) Ср., напр.: Enc. III. 375. Recht. 46. 139. 173 и др.
145) Cp.: Enc. III. 361.
146) Cp.: Recht. 46. 47.
147) Recht. 47. 252.
148) Recht. 47.
149) Recht. 48–49.
150) Recht. 48.
151) Recht. 38. 40. 41.
152) Cp.: Mollat. I. 54.
153) Phän. 442. 443.
154) Recht. 38. См. главу пятую.
155) Recht. 40.
156) Recht. 42.
157) См. Главы восемнадцатуюи двадцатую.
158) Enc. III. 373–374.
159) Enc. III. 359. Recht. 313.
160) "Quelle aller Einzelner". Ph. G. 44.